慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』存巻一零本：解題篇(一)
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1995
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.30 (1995.) ,p.1- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000030-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾
図書館蔵

〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』存巻一零本

― 解題篇(一) ―

平澤五郎

慶應義塾図書館蔵　〔鎌倉末南北朝〕写　存巻一

原装訂、綴葉装、一帖。現在は大和綴仮装訂である。原装時に於いては永年の蠹蝕、毀敗にくわえ、湿気に潤けて紙質は潰破の寸前ともいうべき情況にあった。幸い古書肆村口氏のよる充全な修補改装が施され、かろうじて古鈔本の面影は、その黄染の料紙の中に古雅な墨痕を深く沈めて応時を再びとりもどすがごときである。私事にわたるがその原装時はまさに潰敗を俟つばかりに、その黄染の紙質は暗褐色に汚れくすんで手触れをも拒むがごときであった。且つ、その書跡は料紙のうちに溷濁し古体の運筆の名残がいかにも古鈔本たるにふさしく、寧ろ現状は美麗に洒いそゝがれた感すら想われるのである。自ら書写の年代は鎌倉期の、すくなくとも其の末迄は降らないかと、ともに披閲した故阿部隆一氏との共通する印象であった。あるいは撰者自筆稿本かとも愚かなおもいも駆けたが、素寂自筆の遺跡は寡聞にして識るところにあらず、更に今度の再閲、それなりの審処により、原本成立近き然るべき祖本に拠る

信切なる転写本たると認定するものである。

本書の伝来と出処は奥書・識語、又、印記等も皆無にして審らかにしない。又、往時は、斯界の古老村口氏にお尋ねすることも憚られる若輩にすぎず、疑問のまゝに当推量していたのであるが、それは、本書が以前から収納していた彫琢為樸とでもいうべき「紫明抄」と墨記する欅造りの筐中に次の一紙が併せ納められていたことからである。因みに、その箱書には「紫明抄　零本」（上蓋表中央）、「昭和戊辰（三）歳十一月　教道題」（同裏）に誌している。この筐箱も又その頃のものか。

その包紙表書には

御申書　泉州貝塚願泉寺登町
午　門徒中

と誌し、同裏には重ねて「午ノ年」と記している。本紙は稍ゝ厚手の斐紙にして、次のごとくに略解読される。

銀子四百目　報恩講之志

御門跡様へ右之通進上

遂披露候處志之段

神妙被　思召候弥法義

無油断被相嗜候事肝要之

旨被　仰出候也

午霜月廿一日

泉州貝塚願泉寺

登町
門徒中

右の「御申書」―又は「御印書」―の右上辺には単郭の墨印―判読未詳―が捺されている。この墨印記が解明すれば上記事は講明し得るところであろうが、大略の文旨は本願寺法務より―直接か否かは猶問題を残すとしても形式上では、泉州貝塚願泉寺登町門徒衆―恐らく同町の門徒の報恩講中―に与えた銀子寄進の受取の証と本願寺門跡からの御法言とを兼ねた達し文であろうかと察せられる。

この貝塚願泉寺は天文年間卜半齋了珍を開基とする本願寺下の寺内にあり、戦乱のもと顕如・教如父子等の二年余にわたる移転―天正十一年―のことなどもあり、時に本寺に準ずる格式の、爾後江戸期を通じての東西兼帯の本願寺派名刹といわれる。願泉寺文書・卜半家文書は猶多数を遺蔵するの由である。

右掲の本紙は江戸中期から後期にかけての手跡と推測されるのであるが、同文書の一片とすれば聊か問題を提起することゝなる。

もとより、本書留には本書「紫明抄」に係るの記は何も、触れるところがなく直接には無関係なることは言うまでもないことながら、本書収納にふさわしい古樸堅牢な筐中に併せ添えておさめられていたことである。そのことが偶〻の結果であるとしても、本書の襲蔵もとのかゝわりは臆測を馳せざるを得ない。勿論、その決め手となるのは同寺所蔵文書との検証に拠ることであるが懶惰、その調べを迭している。臆測のまゝに推するところを誌せば、本書は然るべき稀覯旧鈔本として名刹たる同寺に伝蔵されたものにして、何らかの折に、同寺内の門徒衆、登町の講中宛の右掲「御申書」が同寺の保管のまゝに、本書収納箱中に紛れ込んだのではなかろうか、と想うのである。その空想を越

えての積極的な証左はないが、本書伝来の経緯にはそれなりの重みのあるを思わざるを得ないので附言してあらため御教示を許うものである。

猶、此の筐中に和紙一枚の添書、寧ろ近頃―昭和初期頃でもあろうか―の覺え書きの類であるが、蛇足付記しておく。

。紫明抄　零本

岡本加茂縣主清茂旧蔵／座田司民伝来

嘉禎二年写跋文

。紫明抄写　十巻　十冊　釋素寂

と走り書きしている。本書には記すまでもなく右記跋文は存せず、その年紀は紫明抄成立を遥か半世紀期余を遡るものであることはともかくとして、此の添書との関聯を指点するものは皆無に近い。たゞ「。紫明抄　零本」と敢て遡っている処、参照までに追記しておく次第である。

表紙は原装時より本文共紙の、竪二十八・五糎、横二十二・二糎の、この種の本としては大振りの伝存本である。料紙は改装前の褐色に近いくすんだ汚れは濯ぎ去られて黄蘗染の斐紙を再現している。字面高さ約二十五・五糎。毎半葉、十二～三行。墨付丁数、全五十九丁。

外題、欠。序題、「紫明抄序　／　紫雲寺隠侶素寂撰」

内題、「。紫明抄第一　自桐壺巻至末摘花」。巻第編次、「。光源氏物語巻第一桐壺　一名壺前栽」、「(同上)巻第二　箒木(ハヽキ)」、「(同上)空蟬(□□セミ)　箒木並一」、「(同上)　夕顔(ユフカホ)　箒木並二」、「(同上)　局第三　若紫(ワカムラサキ)」、「(同上)　末摘花　若紫並」、と誌され、「並巻」によって標題「光源氏物語」の許に巻次第を構成している。「紫明抄」十巻の巻第編成については後

に觸れるが、この「光源氏物語」の注釈巻次は巻名巻数とは別して施されている。諸本同様である。

此処に本書の書写状況について一言すると、本書の釈文は下記するごとくに、多見する内・外典には本文同筆と追補の異筆―明確には識別困難である―を混じての朱墨訓点、同筆朱声点、同じく朱合点、注符簽等が全巻にわたり施されている。それは前輯の影印・翻印のごとくである。しかしながら、前記訓点はその弁別と共に印刷上の困難を予想され、已得ず割愛することにした。たゞし、墨本文、あるいは朱註書入れ等に施された同筆又は別筆の追補訂正の跡、あきらかなる箇処については既に補註するところである。影印本文との照合の参考にもとと蛇足しておきたい。

印記、上掲の「御申書」のほか捺印を見ぬ。

本書は後述するごとく「紫明抄」成立―永仁元・二年頃―の時代とほど隔てぬ現存する最古鈔本として極めて古態[註一]をとゞめる伝本であるが、残念なことに桐壺巻より末摘花巻に至るの残巻であり、且つ若紫巻に落丁約二丁が見出されるのである。

更に、本書は綴葉装よりの修補、大和綴改装時に誤綴され、以下のごとき現状を呈している。即ち、

紫明抄序―一丁表裏、紫式部系図―二丁表、桐壺巻―二丁裏～二十丁裏、※箒木巻―二十一丁表～二十九丁裏・三十六・三十七丁表裏・三十丁表～三十三丁裏、空蟬巻―三十四・三十五丁表裏、※夕顔巻―四十・四十一丁表裏・三十八・三十九丁表裏・四十二丁表～四十八丁裏、若紫巻―四十九丁表裏（此次、約二丁落丁ス）五十丁表～五十三丁裏、末摘花巻―五十四丁表～五十九丁裏

である。※符を印した箇処における単純なる誤綴であるが閲覧上稍〻混乱を惹起している。いずれ訂綴され原装されることであろうが、翻印に際しては本注釈書元来の叙述次第にもどし、本書の誤綴丁数をそのまゝに附記した。

「紫明抄」十巻の巻第編成はその系統上の類別を辿るひとつの目安ともなることは従来より論述されるところである。本書は存一巻の残存本である故、確かなる結論は導きがたいが、本書の巻第編成は、

○紫明抄巻第一　自桐壺巻　至末摘花

とあり、内閣文庫蔵〔室町末近世初〕写A本・松平文庫蔵〔江戸前期〕写本・竜門文庫蔵〔江戸初期〕写本・内閣文庫蔵〔江戸中期〕写B本・神宮文庫蔵〔江戸後期〕写本・東京大学総合図書館蔵〔室町末〕写本はいずれも巻第一を本書同様に桐壺巻より末摘花巻迄を以って構成している。もっとも松平文庫本以下五本は若紫巻より花散里巻にいたる同抄巻第二を欠巻し、殊に本書に所収する若紫・末摘花の両巻を佚脱して比校すべくもないが、後述するごとくに後補増注あるいは省略等が散見されて、内容上、必ずしも本書と同じくするものではなくして、その伝流の経過の途上において意図的な、又、偶発的な結果をも併せて、今に見る増・減両方の手の加味された伝本のごときが推測されるのである。それに比して、内閣文庫A本は、右述の増注に部分的共有を示すものゝ、本書に検出される特異性の継承ともいうべきか、その末端部においても否定しがたい系統上の流れが所見されて、やはり同一系統本としての展開上にあるといえるのである。

これら数本に対して、京都大学研究室蔵〔南北朝末〕写本・京都大学附属図書館蔵応永十七年奥書〔室町後期〕写本は、ことに前者は本書と極めて近似し、その本文と共に佳く古型をとどめて、両書はそのいずれかをもって原「紫明抄」伝流本と比定すべきかとも迷うがごとき、前後―両書の書写年代の相違はともかくとして―を競うところの伝存本であろうと推考されるのである。

しかしながら、その巻第一の巻第編成は、

○紫明抄巻第一　自桐壺巻　至夕顔巻　　京図本同

と、あきらかに京都大学図書館本と共に本書とは相違する。

この巻第構成は書冊仕立の上の単なる便宜上の再編成―寧ろ転写本の仕立上としての―として安易に対処しうることがらであろうかと躊われるのである。

同京都大学研究室本の巻第二・第三の編成を掲示すると、

○紫明抄巻第二　自若紫巻　至賢木巻　―附　はなちるさと　花散里　　京図本欠巻

○紫明抄巻第三　自阪磨巻　至関屋巻　　京図本同

となっている。

そして、一方、巻第一の編成を本書・内閣文庫A本と同じくした松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本の五本は両本の巻第一に編入されるべき若紫・末摘花の両巻を欠脱すると共に、京大研究室本・同図書館本の「紫明抄巻第二」の構成主要諸巻たる後半、紅葉賀以下花散里までの五巻を欠巻とし、且つ、次には、松平文庫本以下五本は、同じく、

紫明抄巻第三　自阪磨巻　至関屋巻

としているのが注目される。このことは、とりもなほさず上記数本の編成は、巻第一につゞく巻第二として、

紫明抄巻第二　自紅葉賀巻　至賢木巻（若しくは「花散里巻」）

とあるべきものであったかと推測されるのである。

諸本の悉皆調査を経ぬまゝの予測ではあるが、「紫明抄」十巻の前半数巻の巻第編成には、㈠本書以下、内閣文庫A本・松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本、と更に、㈡京都大学研究室本・同図書館本、の二系統が、単に転写における書冊構成の間に惹起した任意且つ偶然の結果ではなくして編者素寂の原撰時の経緯を語るものではないかと想定されてならないのである。本書の書写年代、又、その古態を呈示する注釈の書写状況は、一方古鈔本たる京都大学研究室本との類同する古型と共に、「紫明抄」十巻の撰述状態の面影を共〻にとゞめて僅少なる異同と変容が、その撰述上の前後問題を投げかけているかの感をおぼえるのである。

そして更に、各巻第編成と同じくする内閣文庫A本、次いで松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東京大学図書館本等は、この意味では本書のごとき系脈の許に展じた伝流本ではあろうが、その享受と経過の間に増補・刪省等の改竄と共に誤写・誤脱も錯綜して現状に見るがごときに移行していったのではなかろうかと思われるのである。

この巻第編成は確かにひとつの系統要因を示すものであるが、上記数本のうち、内閣文庫A本にみる次の一例のごときは、その系流本としての残映をとゞめるものとして留意される。それは箒木巻―本書二十五丁表―に、

おほを木のみちのたくみのよろつの物を心にまかせてつくりいたすも

の本文注に、

● 明王之任レ人如下巧匠之制レ木上直者以為レ轅曲者以為レ輪長者／以為二棟梁一短者〔以〕為栱一桶一無二曲直長短一各有レ所レ施明王之任レ人／亦猶如レ是也智者取二其謀一愚者取一其力一帝範

と外典を用い引拠している。この典拠を内閣文庫A本をのぞき、他の京都大学研究室本・同図書館本・松平文庫本

・竜門文庫本・内閣文庫B本・東京大学図書館本等はこれを「史記」としている—但シ神宮文庫本は此の記を誤脱している—。各本における上掲本文の異同は訓点の有無にすぎず、その出典を異にするにとゞまる。此の寓言は「帝範上 審官篇」に所見するところであるが、「史記」の本文には検出されず、その拠ってきたるところを審らかにしがたい。あるいは、同三注のごときにも存するかとも暗推するが浅学懶惰にして及ぶところではない。故阿部隆一氏の「帝範・臣軌校勘記」[註二]を披覧するも当該部の異同すくなく、「王→主」、「任→使」にとゞまる。従って現在のところ「帝範」を原拠とみるのほかはないのである。飜印篇の補註にて既述し更に言及するところでもないが、両書共に普及し撰者素寂の見識の中に当然にしてあるべきものをしかも本書といい京大研究室本といい共に原撰に近き古態をとゞめる古鈔本のなかに両様の典拠を誌し、いずれかに改めるに至ったかは様々の疑問をよぶところであるが、一端の臆測は補註したので参照されたい。たゞ、それは後人の改補ではなくして撰述の過程のことであったろうかと仮想におつるのである。

この巻第の編成を同じくする上記数本のなかで、纔かに此の一例をとってみても本書・内閣文庫A本を除く、他の松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東京大学図書館本との分岐点、あるいは交錯して異流する一の面のごときが想定されるのである。それは各本解題にて後述するが、本書と内閣文庫A本とは両者相互の顕著な異同を見出しながらに、上例のみならず、本書の残映が該本の本文のなかに影をとゞめているのである。

その一部、補註に挙げたのを拾っても、

(イ)桐壺巻の冒頭系図において紫式部兄の惟規の官位を「民部丞」とするは本書と内閣文庫A本のみであり、他はこれを諸本—以下、披見諸本にかぎる—みな「式部丞」とする。

(ロ)同巻、鴻臚館注に引拠する「漢書」文中、「景帝更(アラタメテ)レ名曰二大行人一之」と誤るのも内閣文庫A本が同じくするほか、諸本のごとくに本来「大行令」とあるを二字に分割する誤写を継承するものであろう。

(ハ)箒木巻、「うちひそみぬ」の解注に、本書は「呉 ヒソム万 ロヲスクムレハロノイツル故也」とし、漢字(国字歟)一字をこれに当てゝいる。内閣文庫A本も当該表記を襲うものであり、京大研究室・同図書館本は「口出」と二字として対している。註記したごとくに問題は後に残されるが、ともかくも此処にも一致をみる。因みに松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東京大学図書館本も「呉」一字とするが、それは、単なる転写上の偶々の結果であろうか。

(ニ)同巻、「すきたはめらん女に□〔心〕□かせ給へ」の本文に、「●貞節(テイセツ)不拾(スタハテ)晋書文」と依拠を挙げている。これも「不拾(スタハテ)」に作り、内閣文庫A本は「捨」の異字を当てゝいるが、同じく類同的書承の様相を提示するに対して、他本は「不撓(スタハマ)」―但シ京研本「タマハ」ト誤訓ス―としている。晋書本文の点検を惰るがまゝであるが両意相通ずるものがあるが同一系類の上での余滓でもあろうか。

(ホ)同巻、「口かふたつのみちうたふをきけとなんきこえこち侍し」の本文に引拠する文集の「秦中吟」の後半「貧家女難嫁々〔晩〕孝於姑聞(ヒ)口若欲娶婦娶婦意如何」を、「晩」とするは、本書以下、京大図書館本・内閣文庫A本・松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本等であり、京大研究本は「暁」に作っている。原本文から当然のことながら「早」↔「晩」と対比されるべきものであり、本書系の本文が至当である。これは同本の単なる錯誤であろうが、次の2「聞(ヒ)口若欲娶婦娶婦意如何」と本書本文と同じくするのは京大図書館本一本のみであるが、内閣文庫A本を看るに「聞若欲娶婦意如何」と目移りによる明らかな誤脱を検するにすぎず、もと同系本文を継承す

るものであろう。又、京大研究室本は「聞若欲聚婦聚婦意如何」と書写され、本書とは近似しながらに纔かに「娶」を「聚」に作り、異同する。文集本文を披見するに「聚」字は浅聞にして経目するところではない。もとより意は「娶」であるべきであろう。他本、松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本にいたっては「聞君欲取女婦娶婦」（松平本）と既に原意を喪失している。その点では、本書と京大図書館本、次いで内閣文庫A本・京大研究室本は多少の過誤・脱は存しながらも文集の「君」と上掲本の「口」「若」の異同はあれ、本文引例は正確を期し、本来同一である。

(ヘ)夕顔巻に、「〔い〕つれかきつねならんなたゝはかられ給へかしとの給」の注に「文集 古塚狐」より索出し、「●假色迷人猶若是真色迷人應過此彼真此假俱迷人〻心悪假貴重真」[1※][2※][3※]を引いている。傍記した1※・2※の「真」字は京大研究室本の一本のみが共に「直」に書している。同本の誤写なるは3※を「真」とするを以ても明白であるが、京大図書館本、内閣文庫A本、松平文庫本以下五本が拠るところ自ら別するのであろう。

(ト)、(ハ)はともかく、若紫巻の巻初、「わらはやみにわつらひ給」の当該漢字として、本書は「●ゑ痞」とし、内閣文庫A本は同じく明らかに「亦痞」としている。京大研究室本の外は欠落巻にあたるので審らかにしがたいが、同本は「痞」とも「痞」とも判別しがたく、補註したごときの理由も考慮されて決定しがたいのが実情である。たゞし内閣文庫A本が「亦痞」と明記したことには又それなりの理由が存したことであろうし、且つ伝流本のもつ一斑が残滓したものではなかったろうか。

ともかくも、例外は存するにせよ、それらは書写上におけるためらいと解誤を併せもつ古注の難義に起因されていることは否まれないことであろう。そして転写時に於ける実事は依拠伝本を遵守するのほかはなかったのが当代一般

の手法ではなかったかと推測し、且つは自ら痛感するところでもある。その事に愚見を転ずれば、上掲の纔かな例示ながら、本書から内閣文庫A本への展開は伝流の過程に後述する増補・訂正・刪省のごとき整定と、それに伴う錯誤・脱をも併持しながらに墨守を余儀なくせざるを得ない残影をとゞめている一本として措定したいのである。

一方、上記したごとき前半の巻第編成を同じくする松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本は此の点においては同系として交錯するところはすくなくして、後述当該解題にて言及するごとくにいずれかの時期においてか、本書・内閣文庫A本系と同類の大枠のなかから支系し袂別してゆくのである、と推論されるのである。

本書の特徴を呈示している更にもう一つの特色ともいうべきか、釈注の素朴な古態—京大研究室本以下に猶且つよく承守されきたるところではあるが—を具現しているところである。影印にて再現を期した所であるが、古典籍の注形式の実際を提出するものとして留意される。

しかし、此処ではしばらく措き、本書にみる叙述次第の混乱のごときの一例を掲示することにとゞめる。

桐壺巻、同帝と左大臣の応答歌には、

いときな〔き〕はつもとゆひになかきよをちきる心はむすひこめつや

●稚形　イトキナキスカタ　日本記詞也

ゆひ〔そ〕むるはつもとゆひのこむら〔さ〕き衣の色にうつれとそ思ふ

むすひつる心もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあせす〔は〕

●今日よりはあ〔ま〕のかはらはあせなゝんよそみ水ともなくたゝわたりなん　後撰

●拾遺云三善佐忠元服のゝち　能宣

と附註している。

他諸本は補註したごとくに、右掲本文とその内容上において異るところではないが、末尾の附記「●拾遺云三善佐忠云〻」の記述が当然のことながらに「ゆひそむるはつもとゆひの云〻」歌の前に配置されて自然な序次による叙述形式である。記すまでもなく当該歌は拾遺集巻第四賀三七三番「みよしのすけただかうぶりし侍りける時」―「抄一七〇」―の同賀詠である。そして次の「今日よりはあまのかはらは云〻」歌は後撰集巻第五秋上三四一番、七夕歌群中の紀友則詠として採録されるところである。その類例歌としての是非はともかくとして、本歌のあとを承けて、本書はいかにも唐突に「●拾遺云三善佐忠云〻」と追記しているのは草稿本―假令定稿寸前の稿本であれ―というはともかくとしても叙述の排序は解しがたく訝しく感受されてならないのである。假りに本書―或は依拠本―の誤脱とその補写であるならば当然位置すべき本来の場に追補するであろう。やはり、それは単なる書写上の追補、あるいは錯叙ではなくして、依拠の序に順ったものであろう。「紫明抄」に所見する夥しい引拠例証にあげる出典・引歌等は必ずしも個々すべてを明記するところではないが、本例の場合、本書をのぞいて諸本すべてが然るべき処に位置するのを想うと、諸本各々その書写の年代を異にするにせよ、それら諸本―纔かの披見伝本にはすぎぬが―の祖本とは、其処には疎遠の逕庭はもとより自ら存するにしても一系統を襲うがごときものではなくして厳密には「類」を形成する類中の系統として各伝本の祖型を想定せざるをえないのである。

上記したごとく、「紫明抄」前巻部の巻第構成から其の系類を仮想し、管見中に入りしものよりこれをあらため整理、弁別すると、

(一)
(1) 慶應義塾図書館本―本書
(2) 内閣文庫A本
(3) 島原図書館松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東京大学総合図書館本―以下は緒言にて一覧し、重ねて本稿尾に附載したので省略―

(二)
(1) 京都大学国語学国文学研究室本
(2) 京都大学附属図書館本―以下同様に省略―

のごとくに類別されるのである。以下、個々伝本のもつ諸特色についてはそれぞれ後述することにするが、こゝで上掲の記を再述することにとどめるとすると、(一)(1)・(2)は諸点より瞰て―後述の顕著な異同はともあれ―同一の祖類が想定されるのであるが、上記の叙述様態よりしても複数の別系として分脈したものであるかと推測する。同(3)系は上述のかぎりにおいても、(1)・(2)と別する系統本であるが、繁縷を避け併せ言及することにする。

この叙述次第の異同は「紫明抄」においては殊に顕著な相違として敢て呈示するまでもないが、極めて其の古態を墨守するかのごとき本書・京大研究室本であれば、書写の上での是非もない理由をも併せて間々相互に変化が見出されるので、その二・三を例示するをもって代えることにする。

1 巻初系図は本書は翻印に見るごとくに紫式部を為時女として惟規の次にあげ、その略歴一部を左傍に附記するにとゞめ、改め式部・同母の履歴を別項要約するのに対し、京大研究室本・同図書館本は系図当該部に一括し左右傍記する形式をとっている。当然のこと、書写紙面上のことがらに属するものではあろうが、内閣文庫A本以下、松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本等六本にも、前者の名残でもあろうか本系図とは別

して書写されている。又、

2　前者とは稍〻その趣を異にするが、本書箒木巻のなかほどに―三六ウ・三七オ―

さうそくもなく〔て〕いとひたやこもりにおほつかなければ―京研・京図本「さ」ヲ「せ」トス―
　　A　直隠（朱）
●うきによりひたやこもりと思へともあふみのうみはうちて〻を見よ　和泉式部集
　　B　消息　アルカタチ　日本記
　　アリサマ　文集

と書写され、内閣文庫A本と京大研究室本・同図書館本の両三本には掲示本文は同じくしながらも、その序列をB→Aの順を踏んでいるのである。わずか転写の上の錯失ともいいがたい。本抄の注記の順次をみると、語釈から典拠歌の引用に移るという形式をとるのが一般であるからである。しかも文頭「さうそく」とあれば猶更である。因みに松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本は、その叙述は変更するが順序次第は同じくしている。煩瑣ながら参考までに例示しておくと　本文、松平文庫本、―竜・内B・神・東本は該本本文―

せうそこもなくて　／　消息　アルカタチ　日本記
　　アリサマ　文集説
ひたやこもりにおほつかなくて

直隠　ヒタヤコモリ
うきによりひたやこもりとおもへとも　（竜・内B・神本）
あふみのうみはうちいて〻みよ　和泉式部集

と、源氏本文の小異、朱傍記の注文化などの変容が見出されるが、やはり、その序第を襲うものである。もっとも、この逆をとる場合も次葉裏に見出すのであるが、それはそれなりに理由も存し、別箇に註附[註三]することにした。

かゝる一・二例にすぎないが注釈形式の統一は重く叙述次第の整定化とかゝわるものであれば敢て掲示贅言したのであるが、その書写料紙との物理的制約とは別して古鈔両書の間には多々此の次第に異同が散見されるのである。

3　本書と京大図書館本について此処に併せ追補しておきたいのは、処々に見出される重補、再記の釈注である。

(ア)　本書桐壺巻六ウには、

みこさへむまれ給ぬ　◉光源氏　六条院　降〔誕〕事也

と注記するのは京大研究室本も同じくするが、同本には更に、数行のあとに―本書七オ二・三行の間に、

〻この君うまれ給てのちは

〻光源氏　六条院　降誕事

と本書、又京大図書館本以下他本には所見なき、且つ無意味な二行を書加えている。但し、却除の符かへ簽が附されている。

(イ)　本書、同箒木巻二十一ウには、

おさ〳〵(1)　〔轉〕口〔了〕也……◉番長（オサ〳〵）　異説

と書写し、更に

◉(2)日本記云成〔務〕天皇……（中略）……是為中區□蕃屏

◉又治　オサ〳〵シ　◉又優　ヲサ〳〵シ

と記している。諸本は本書(1)の「◉番長　異説」の許に「治（オサ〳〵シ）　優（オサ〳〵シ）」―諸本小異アリ[註四]―と追記している。但し、京大研究室本にかぎり、諸本同様(1)の追記と共に(2)にも又、「◉又治　オサ〳〵シ　◉又優　オサ〳〵シ」と重記している。

そして又、前者同様に此処にも〻簽を施している。本書の誤脱とも考えられるが、この「異説」は本来「●番長（オサく）」にかゝる附記と判断され、他の諸本にこれを欠いているのは当然のことと推測される。註記したごとくに、内閣文庫A本等に看取される「番長（ヲサく） 異説　治優 同」のごとくに改訂される理由はそれなりに存したのであろう。その時期は何時のことであるかは猶問題を残すであろう。

(ウ) 同箒木巻二十六オには、

えたのむましく　●吉（え）　つらつえつきて（京研本）　●支願（京研本）

のりのし　●法師　またけろうに侍し時　●下臈

と本書以下諸本―但シ内閣文庫A本・松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本ニハ引歌一首ヲ増補シテイル[註五]―は所掲本文と略同している。しかるに又、京大研究室本は上掲文につゞき、行を改め

〻つらつゑつきてむかひゐたり　〻またけろうに侍し時

〻●支願 ツラツエック　〻●下臈

と二行にわたり重複しているのである。「つらつゑ」等の語頭に更に朱合点を重記しているのは衍文消去の簽符ともとれる。が前掲文に看る「●支願ツラツエック」の附訓などが加わっているのを惟うと、やはり原依拠本に元〻書写されていたのであろう。

わずかに顕著な数例を例示するにとゞめたが、それにより、本書伝本系と京大研究室本系との識別を確認する証跡とするには伝存本の交錯状態は一見平易の感を印象づけながらになかなかに紛雑している。たゞし、此処にて略推測して遠からずといえるのは釈文の重複、又は繰返しの叙述が間〻偶目されることである。しかし、それがそのまゝに

編述の経過とか痕跡を示唆する実体として確認し立証し得るかという課題に係ると相互の矛盾点は多岐の様相を呈し躊われるのは否みがたい。

上述の主点が本書と京大研究室本に焦点を絞り言及してきたのは再三の繰返しになるが巻第の編成という根本問題を異にしながらに極めて近似隣接する位相を両書が提示する伝存古鈔本であるからである。翻って同編成の内閣文庫A本、殊に松平文庫本以下は—後に詳述するが—纔かな上例、註記等によっても、その内容上からは一見して同一系統の伝存本としがたいのであることを思えば、この両書の比較検証が「紫明抄」十巻の原型に接踵する最もよき方便ではなかろうかと愚察したことにほかならない。推論を結するには猶ほど遠きは言うまでもないことながら、両書は「紫明抄」の略定稿に近き基流ともいうべき位相を遺存する、その両面を書承する伝存本であろうともいいえようか。その編述の前後は未だともかくとして、かく一応措定しておくことにする。

両書の比較異同については更に詳細に言及すべきものであるが、京大研究室本については先学の翻印[註六]、近時同書影印本[註七]の上梓の成果をみることであり、向後の参照の目安にと偶目するところ恣意ながら拾掇[註八]して代えることにする。

猶、本書には若紫巻五十二丁裏、七・八行の間に、京大研究室本・内閣文庫A本には本行に書写する類歌を

- あしわかのうらふきよする白浪のしらしな君はわれ思ふとも

を同筆細補している。原依拠本の補入を踏襲するというよりも誤脱補写とみるのが自然であろう。

註一　現紫明抄に至る素寂の初期註釈については、稲賀敬二氏の詳細な考証があり—「源氏物語の研究」第二章四—啓発されるところ尠しとしない。その結語に、

異本紫明抄に見える素寂説・吉川家勘物―（同家蔵源氏物語）―に見える素寂初期の註と見られるもの、及び、紫明抄の素寂説の三者の関係は、一つの軸の上に整然と配置して、素寂説の展開を説明するには複雑な要素が多くて困難であるが、大きく素寂の初期から晩年紫明抄への展開・流動・変化の輪郭は辿りうるように思う。

と述べられている。素寂の初期註釈は、本稿の扱う所謂晩年の「紫明抄」、現存伝本の系統についての解題であって、直接には対象の外ではあるが、しかし、その関聯と省視は、その具体的内容と共に註釈形態の上にも当然の事ながら反映するところであったかと臆測される。即ち源氏本文に対する当初からの附註傍記の原案から一註釈書として整備を期するに際しても、その名残りのごときが叙述の上に照応されるのであろう、と。「古態」と記したのは漠然ながらも、単に古写本の謂のみにかぎらず、上記の意味をも併せて、本書はその余音をとゞめるものかと惟われる故でもある。

註二　阿部隆一氏「帝範臣軌源流考附校勘記」　斯道文庫論集第七輯　昭和四十三年

註三　上例とは相反する証例も確かに間〻散見する。次の一例は本書とは殆んど同文であるので京大研究室本を挙げる。異同は（本）―本書―と傍記する。―同本三ウ・本書三七ウ―

にはのもみちこそふみわけたるあともなけれなとねたます

● B 秋（本）あきはきぬもみちはやとにふりしきぬみちふみわけてとふ人はなし　古今

● A 妬　ネタマス　● 励　ハケマスナリ

と叙述の順序も両本は全く同じくし、略同系の京大図書館本も同様であるが、内閣文庫A本、松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本はA→Bの次第に書写している。殊に内閣文庫A本の改変はなんらかの意図するところを惟わずには解しがたい。当該句が源氏引用本文の末尾に存するのを考慮のうちにいれると寧ろB→Aの叙述が妥当かとも推測されるのである。古今歌の引拠も又適切である。しかし、こゝで、たゞこれも後人の改変とのみ処理するのも一方安易な解といわざるを得ない。あるいは、それが事実に近いとしても本注釈書のもつ方向性のごときが働いていたことは否まれないであろう。更には、その淵源はもとへと遡るやもしれないか、と臆測も馳せるのである。

註四　その小異を誌すと、「◎番長（オサ〳〵）異説　治（オサ〳〵シ）優（オサ〳〵シ）」―京研本、「◎番長（オサ〳〵）異説　◎治（オサヽ也）◎優（オサヽ也）」―京図本、「番長（オサ〳〵シ）異説　治（オサ）優（〳〵シ）同」―松・竜・内B・神・東本、等である。

註五　内閣文庫A本、松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本には、

えたむつましく　※「けうして　つらつえつきて　のりのし

吉　興也　」　支顕　支頤イ　法師也

なけきこるやまとしたかくなりぬれは／つらつえのみそまつゝかれける

またけろうに侍しとき　／　下臈也　松平文庫以下五本同、内閣文庫A本小異―主に※符箇所―あり。

と、※符の一文を叙次をあやまり挿入すると共に「つらつえ」引拠歌一首を補っている。おそらく後人の増注であろう。

註六　吉澤義則　「紫明抄」十巻「未刊国文古註釈大系　第十冊」昭和一二年

玉上琢弥編　山本利達　石田穣二校訂　「紫明抄　河海抄」　昭和四三年

註七　「紫明抄　上（下）　京都大学蔵」　京都大学国語国文資料叢書　昭和五六・七年

註八　本書は冒頭にふれたごとくに旧代の名残りの蠹冊であり、料紙の汚損と相俟って既に判読不明の箇処もすくなくない。上述のごとく幸甚にも極めて本文・形態共に近似し原形をとゞめる両古鈔本によって、その一部とはいえ再現の可能性を見出しうるのである。とはいえ、猶両本には相互に叙述形態、異同語句・誤写・誤脱本文、更には書体不明瞭なる書写なども散見して、それは相互補完の確実さを本来期すべきであろうが、寸記したごとくに向後の参酌の便宜上、此処には両書の異同を拾掇したものにすぎない。

本文翻印篇においては判読不明又推定可態箇処に他本校合を敢て避けたのは上記の京大研究室本の翻印・影印が公表されているからにほかならない。その上に補註したのは両書に見出す異同・存疑を最少限に採りいだし、併せて披閲伝本との間の比較のもとに愚案を蛇足したものである。

したがって、こゝでは上記補註以外に経目するところ、稍〻任意的な微細な異同をも含めるものとする。―当然の事なが

ら、此処では、漢字・仮名・仮名遣い・送り仮名・正字・異体字等の異同は煩雑を避け省略している—その適否については御判別を願うところである。上段は本書、下段は京大研究室本である。（ ）圏内に諸他本との異同を略記する。

以下、各本解題の校註に於ても本抄巻第一の註記においては、慶応本を中心に据え下段に当該本をあてる方針に統一する。参考までに附記するところの（ ）圏内の比校本は両者にわかれることがあるが、掲示なき伝本は原則として慶応本の本文であると理解されたい。

桐壺巻

二オ2行（以下「行」省略）参儀—参議（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同、以下上掲ノ如キ小異省略ス）、二オ2母定方卿女（京図・松・竜・内B・神・東本同、但シ傍記「公」ナシ、内A本「母定房卿女」ニ作ル）—欠、三ウ1 ●光源氏（京図・内A本同）—●光源氏系図（松・竜・内B・神・東本同）、五オ2 証拠（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—証拠、五オ3 たて申へき（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—たて申へき、七オ12 悪生疾 文集—悪生瘡 文集（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）、七ウ8 古人注如此（内A本）註（内A・松・竜・内B・神・東本同）—古人説（京図本同）、八オ10 源氏君みつにてはゝにをくれ給 ●例（内A本同）—源氏君みつにてはゝにをくれ給（京図・松・竜・内B・神・東本同）、八ウ4 本。三月—本三月（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同、但シ内A本「月」ヲ「日」ニ誤ル）、八ウ11 おたきといふ所に（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—おたきといふ所には、九ウ8 未為正員公□之女為女御事—未為正員公卿其女為女御事（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）、一オ3 拾遺 兼輔—後撰 兼輔卿（内A本同、京図本「後撰 兼輔朝臣」、松・竜・内B・神・東本「後撰 兼輔」、一ウ8 取〔金〕釼鈿合（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—取金。鈿釼合、三ウ5 日をゝかす—日をかゝす（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）、三オ10 専使とはいふに（内A・松・竜・内B・神・東本同）—専使といふに（京図本同）、一五ウ2 雲居をひゝかし給（京図・内A本同、cf松・竜・内B・神・東本「くにをひゝかし給」—雲井をひかし給、一六オ5 〔典〕楽（京図本同、cf松・竜・内B・神・東本「典楽 客或本」）—曲楽（cf内A本「曲薬」）、一七オ4 父子之情（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—

父母之情、一七ウ6 孫庇第二間有引入（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—孫庇第二間有引、一七ウ7 皆盛折節（柳莒歟）（cf内A・松・竜・内B・神・東本「皆盛折節」）—皆盛折敷（cf京図本「皆盛柳莒」）、一八ウ3 火さ口〔御〕〔座〕 ●冠者也—火さの御座冠者御座也（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同、但シ本行二行ニ表記ス）、二〇オ4 左右左取笏（内A本同）—左右左次取笏（京図・松・竜・内B・神・東本同）

箒木巻

二オ3 号玉光宮好色人也（内A本同、京図・松・竜・内B・神・東本「号玉光宮好色無双美人也」（雙（松本以下））ト本行トス）—号光玉宮好色人也、二オ8 ●宇多—斉世親王（三品式部卿）—英明— ●宇多—斉世親王（三品兵部卿）—英明（各本書写ニ乱レアリ、京図本「三品兵部卿 宇多—斉世親王—英明」、内A本「三品式部卿 宇多斉世親王英明」ト本行、松・内B・東本「宇多 三品兵部卿 斉世親王 英—」ト行間細補、竜・神本「宇多斎 英—」ト細補シ、時代ト共ニ原型ヲ失ツテイル）、三オ3 ●位はかりにて無官を非参議といふ—●位はかりにて無官なるを非参議といふ（但シ「位はかりにて」ノ見消チヲ更ニ朱筆ニテ消去シ、「なる」ヲ同筆消去シテイル、コノ混乱ガ書承ニモ派生シ、京図本「●無官なるを非参議といふ」、内A本「位はかりにて無官なるを非参議といふ」、松・竜・内B・神・東本「無官を非参議と云也」ノゴトクニ転化シテユク経緯ヲミル）、三オ8 詠吹毛求疵（京図・内A・松・竜・内B・神・東本「無罪聞之者足以誠」）—無罪聞之者以戒（内A本同）、三ウ4 あふさきるさにて（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—あふさきるさこそ、三オ2・3 あはつかに／●淡々たる也（内A本同）—あはつかに／●淡談たる也（京図・松・竜・内B・神・東本同）、三五ウ2 そはつき ●よしつきそはみたる也（内A本「そはつきよしつき そはみたる心也」ト類同ス）—そはつき／●よしつきたるなり ●そはみたる心也（京図・松・竜・内B・神・東本）、三五ウ11 いといきをひ（内A本同）—いといきほひ（徳（松・東本））（京図・松・竜・内B・神・東本同）、二七ウ1 古今貫之（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—古今紀貫之、二七ウ7 よくなるわこむをしらへとゝのへたりけるを（内A本同）—よくなるわこんをしらへとゝのへたり（京図本同、cf松・竜・内B・神・東本「よくなるわこんをさゝへとゝのへたり」ト誤ル）、

二元ウ1 術婆伽驚て（内A本同、松・竜・内B・神・東本「術婆伽おとろきて」ねふりさめて或本ト校合傍記）—術婆伽ねふりさめて（京図本同）、二元ウ5 遊仙窟文（京図・松・東本同、竜・内B・神本「遊仙窟」）—幽仙窟文（内A本同）、二元ウ8 いつくにかあらむ（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—いつくにかはあらん、三七オ5 吟澤畔—今澤畔（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）、三七オ6 大夫□□あらすや—大夫にはあらすや（京図・松・竜・内B・神・東本同、内A本「大夫ニあらすや」トス、本書モ又一字ノ蠹損ナルカ、不明）、三〇オ8 ふたかり侍りけりと（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—ふたかり侍りと、三一オ2 ●茲也 おましむしろ也（cf内A本「茲おましむしろ也」）—茲也 おましむしろ也（京図本同、松・竜・内B・神・東本「茲也或本」）、三一オ5 わかめかりあけに（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—わかめあけに、三ウ12 あいなうおほえ給—あいなうおほす（京図・内A本同、松・竜・内B・神・東本ハ本文省節ス）、三ウ7 人のきかくに（内A・松・竜・内B・神・東本同）—人のきかくも（京図本同）、三ウ10 わかれ給程（京図・内A本同、松・竜・内B・神・東本本文省略）—わかれ給あとほと

空蟬巻

三五オ1 ●頓也（cf内A本「頓也 頒アカル、也」）—●頒也（京図本同、松・竜・内B・神・東本「頒アカル、也」ト混淆ノ跡アリ）、三五ウ12 うちきゝ同けれとも—うちきゝはおなしけれとも（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）

夕顔巻

四〇オ8 ●菅三品公良かほかは（内A本同）—●菅三品云公良かほかは（本行トス、京図・松・竜・内B・神・東本同）、四一オ8 ゆへつきたり—ゆへつきたれは（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同、但シ声点ヲ欠ク）、三元ウ1・2 假女妖容猶淺・女為狐媚容則深（但シ欄外ニ「害」ト同筆追訂ス）—假女妖害猶淺・女為狐眉害則深（京図・内A本同、松・竜・内B・神・東本ハ猶淺或本（内B本「或本」傍記欠）前者1ヲ「假女妖害漏渉」トシ、2ヲ「女為狐媚害則除」ト誤ル）、三元ウ10 蘂芽処〻藥初開（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—蘂芽処〻初藥開（別筆）、四三オ4 ●居累卵之危（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）—●居累卵之花、四三オ5 託於桐

葉耳與幾何―託(内A本)於桐葉耳其與幾何（京図・内A本同、松・竜・内B・神・東本「詫於桐葉不其与幾何」ニ誤ル）、四三ウ2 よをかね給ゆくさきの（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―よをかね給ゆへさきの、四三ウ12 おはしける程に―おはしましけるほとに（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）、四三オ3 たてまつりたりけれと（京図・内A本同）―たてまつりけれと（cf松・竜・内B・神・東本「奉りけれは」）、四三ウ2 へちなうの方にそ（別納）（内A本同、cf松・竜・内B・神・東本「つちなうのかたに」ニ誤ル）―へちなうのかたにも（別納）（cf京図本「へちなうのかたにて」）四四ウ8 すくす心ちして（内A本同）―すくる心ちして（京図・松・竜・内B・神・東本同）、四四ウ12 みつわくみて侍なり（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―みつわくみてなり、四五オ12 日仏事勤□（「之」諸本）（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―日仏事勲之（次行ニモ又「今夜可勲累也」ト他本「勤」ト異ル）、四五ウ12 ●檀那田持丸将軍（村歟（別筆））―●檀那田村丸将軍（京図・内A・竜・内B・神・東本同、松本「村」脱ス）、四七オ2 をとめの局はかりにこそ候へまれなることはを―をとめの巻はかりにこそゆへまれなる詞を（竜・内B・神・東本同、京図本「巻にかりに」ト誤り、内A本「ことはを」ヲ「事はを」、松本「を」脱ス）、四七オ10 申さるゝむねも（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―申さるむねも、四七ウ8 女平隄之礼―女平堤之礼（松・竜・内B・神・東本同、京図・内A本「女平提之礼」トス）、四七ウ9 あはれわすられ給はす―あはれわすれ給はす（京図・内A本同、松・竜・内B・神・東本本文省略ス）、四七ウ12 御心のくさはいなり（cf内A本「御心のくさいひなり」）―御心のくさはひなめり（京図本同、松・竜・内B・神・東本「御こゝろのくさはひなめり」ト校合ス）、四八オ5 ついたちころにそ（内A・松・竜・内B・神・東本同）―ついたちころには（cf京研本「ついたちころにて」）、四八オ7 ●餞別送物也（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―餞別送物、四八オ8 ●醐同事也（内A・松・竜・内B・神・東本同）―●醐日事也（京図本同）、四八オ12 そふる扇の風なわすれそ（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―そふる扇のかせにわすれは、四八ウ5 空蟬の城外と（京図・内A・松・竜・内B・神・東本同）―空蟬の城那と

若紫巻

五〇ウ2 ●答云一義云（内A本同）―答一義云、五一オ6 御てひとつあそはして（内A本同）―御てひとつあそはし、五三オ7 袖のみぬるゝ―袖のみぬらす（内A本同）、五三オ8 王命婦（朱）●王は姓也（内A本同）―王命婦／●王は姓なり 王姓可考、五三オ

10 ●すみそめて—すみそめの（朱）（内A本同）、三ウ11 たちとまり霧のまかきのすきうくは（内A本同）—たちとまりきりのすきうくは、三オ3 野をこえ—野をもこえ（内A本同）

末摘花巻

三オ1 めそとゝまる（内A本同）—めそとまる、三ウ4 論語云紅紫—論語云紅紫（葉本）（内A本同）、三ウ5 藝／息刑反下同（cf内A本「息列反」ニ作ル）—藝息利反下同

両本、本書と京大研究室本とは上掲の対比においてもあきらかなように書写伝本としては極めて異同するところはすくない。両書写本の釈注書写形態には多少の叙述方式を異にする処は散見するが、よく類同し、源氏本文引用の合点（主に朱）、注記符「●」（朱）、傍記書入（朱）—假名本文に対する当該漢字を中心とする—、はたまた、附訓、返点、声点（朱）等にいたってもその過半を同じくしているのが認められる。ことに声点は殆んど共通し、翻印補註に誌したごとく二・三の本書に欠脱—本書の蠹害による破損又は相互間の誤写かと推定され—するにすぎず、両書の依拠両系祖本の完稿時近きをふさわしく物語るのである。

しかしながら、一方、さきの翻印補註に喚起されるごとき存疑、又相違異同、上掲一覧の表においても単なる誤字・誤脱とは看做しがたい明白な錯乱諸点も散見され、両書は相互に補足することにより原撰本文の具現にとちかずくことであろう。惜しむらくは本書が「紫明抄」十巻中、その初巻を伝存するにとゞまることである。そして余巻は京大研究室本をのぞき他の伝存諸本が後述するごとく多分に後人の加筆、刪節のあとが著しきことにより、同本の瑕瑾を訂しえぬことが惜まれるのである。

右の両本の異同掲示にあたり当該箇所について他七本との対比を併出し附記したのであるが、その限り—掲示範囲内—においては、本論にて仮想した系統分類を否定する要因はすくなくして、しかるべき蓋然性は認められるかと推定される。就中、本書と内閣文庫A本との、末端的語句上であれ、その特徴的な類同には此処にも又いなみがたいものが看取されるのである。それに対し、㈠—(3)松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本は前者両本の系流を呈示しな

がらに、恐らく伝流の間に混淆的本文を構成し、更には又現状に見出すごとき㈡―(1)・(2)系の本文校合をも加えて前者㈠―(1)・(2)とも屢々おもむきを異にして一見別系のごとき印象をとゞめているのである。

この推測は、しかし上述の校合当該部の結果にすぎず、再三繰返し、又後述するごとくに㈠―(2)内閣文庫A本、㈠―(3)松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本には本書にみぬあらたな増訂の著しさには既に元来の面影を変容しつゝあった経緯を想定せずにはいられないのである。特に後者㈠―(3)系においては顕著である。

この両系の補・刪に比すれば、㈡―(2)京大図書館本は㈡―(1)京大研究室本の系流を比較的ではあるが継承し、その原態を保留しているのである。その観点にたてば、㈠―(1)と㈡―(1)・(2)の両三本が近似する理由が了解されるのではないかと思われるのである。

国立公文書館内閣文庫蔵〔室町末近世初〕写　存巻一

袋綴、一冊。茶褐色表紙、竪二十五・五糎、横十九・九糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十二・四糎。毎半葉十一～十三行。本文墨付、全七十丁。

外題、表紙左肩に「紫明抄」（本文別筆）、又、上記題左に更に「紫明抄」、本文同筆の打付朱書が存する、元来の外題であろう。扉題、同左肩に「紫明抄」、右側に所収巻名目録を誌す。即ち、「桐壺」／「箒木」「空蟬」「夕顔」／「若紫」「末摘花」、の同筆三行である。序題、「紫明抄序　紫雲寺隠侶素寂撰」。内題、「紫明抄巻第一　自桐壺巻至末摘花」。巻第編次、「光源氏物語巻第一」―諸本に「桐壺　一名壺前栽」と下方に記するを省略し、次行に注する内裏六殿舎のはじめに「桐壺　一名壺前栽　淑景舎」と記述し省略している―、「（同上）巻第二　箒木」、「（同上）空蟬　箒木並一」、「（同上）夕顔　箒木並二」、「（同上）巻第三　若紫」、「（同上）末摘花　若紫並」、と慶應図書館本と同じくしている。

本書にも又、朱筆の合点・注簽符・書入れ等が散見するが、慶應図書館本・京大研究室本等に比してすくなく、朱墨訓点は両書と略共通するが、独自異同が間〻見出される。

印記、「浅草文庫」（重郭方形朱印）、「昌平坂／学問所」（単郭方形墨印）が巻首・尾に捺されている。

本書は慶應図書館本にて既述したごとくに「紫明抄」巻第一の巻第編成上より類別すれば同系一本として位置するものであり、翻印補注、又同解題註記に検証されるごときの、慶應図書館本本文のもつ特色とも云うべき一面を残滓のごとくに伝存していて、その点、確かに該本の系流本であることは現存伝本から瞰て否まれないであろう。

しかし一方、本書には該本に載録せぬ、㈠本文・釈文―纔かながらの書入れ―が処〻に経目される。他方又、㈡該本所見の釈文、本文の佚脱あるいは任意な本文刪節、更には、上記の補・刪本文の別異とはことなる、㈢本文・注自体の異同―それらの多くは誤読・誤写をまじえた伝写の間に生じたものであろうが―である。それら㈠～㈢は該本に比較すればやはり顕著といわざるを得ない。如上の結果から勘合して、現在のところ本書は原撰本以降における増注書入れの本行化、更に任意な―或は意図的な―本文刪補にくわえて、永い伝流の間にあっての錯過、誤写などの相混った伝存一本と仮定しておくことにする。

以下に、慶應図書館本とを対照し、本書に看取される変容のあらましを㈠～㈢と跡を追い言及してゆくが、本書の場合は前掲書のごとくに比較的細部にわたる掲示は殆んど不可能であるので、極めて顕著な例を拾い、参考までに他は別註掲出[註]することにとゞめる。且つ、前掲書にかゝげた補註・比較註記の当該例は此処では排除するので併せ参照されたい。上段慶応図書館本、下段内閣文庫A本である。

(一)

箒木巻

1 三オ10 女のこれはしもとなむつくましき—女のこれはしもとなんつくましきはかたくもあるかな（松・竜・内B・神・東本同）

2 三ウ8 なほ人のかむたちめまてなりのほり●直人也 地下之輩也—（本文同、省略）直人也 地下之輩也 上達ノ公卿也（cf松・竜・内B・神・東本「地下也之輩」ト異同スルモ略同）

3 三四オ4 うへ〔は〕つれなくみ〔さ〕ほつくりて／●操也—（本文同、省略）操也（ミサヲ）コヽロハセ はちす葉のうへはなれな（松本以下）きうらみこそ物あらかひ はつくと いふなれ 後撰（松・竜・内B・神・東本略同、但シ「コヽロハセ」欠、又松本以下五本ハ同歌ヲ双行細注トセズ、本行トス。）

4 三六オ6 つらつゑつきて●支願

—つらつゑつきて 支願（※）ツラツヘック

なけきこそ山（る）としたかくなりぬれはつらつゑのみそまつゝかれける（松・竜・内B・神・東本）（松・竜・内B・神・東本略同、※符、松・竜・内B・神・東本「支願 支願イ」ト校合、附訓「ツラツヘック」欠）

5 三八ウ7 あはれたへさりしもやくなきかた（片）思なりけり（内A本）（ナシ同本）

●いせのあまのあさなゆふなにかつくてふあはひのかひのかた思にて

—（本文又「いせのあまの云〻」引歌略同、次ニ更ニ一首アリ）

われはおもひ君はのけひくこれやこの涙のいろのあわひのかたおもひ

6 三オ6 きぬのおとなひ—きぬのをとなひさゝやかにはら〳〵ときこえて／少〻狹〻也（松・竜・内B・神・東本略同、但シ「少〻狹〻也」欠）

7 三ウ10 ありつるこのこゑにてものけ給はる／●ものゝけしきうけ給はる也—ありつるこのうゑにてものけ給へ（松・竜・内B・神・東本）はるひさしにもおほとのこもりぬる／ものゝけしきうけ給はるなり 庇也（松・竜・内B・神・東本）ヒサシ（松・竜・内B・神・東本同、但シ「ヒサシ」訓欠）

8 三三オ5 人〳〵さけす／●不遠也—人〳〵さけす 不遠也／心なからもうれたく 憂也（松・竜・内B・神・東本略同、但シ上記五本本文ニハ更ニ「或本 心なからけうたく」ト下記ス）

夕顔巻

9 四〇ウ7 ●人ことにかう色なる扇と思へり香 薫物也（松・竜・内B・神・東本付校「或本」）にたきしめ／たるかこかれたる心ちのするといへるなるへし—人ことにかう色なる扇と思へりしかにはあらす香ニたきしめたるこかれたる心ちのするといへるなるへし

参考マデニ松・竜・内B・神・東本ノ当該部ハ「或本云」トシテ慶本ヲ細記シ、次ニ、本行ニハ、

人ことにかう色なるあふきとおもへりしかにはあらすたき物をこかるゝ程にたきしめたるといふなるへし（傍点稿者）

ト見ユ

10 四一オ 7●中にさらぬわかれのなくもかなち〔よ〕もといのる人のこのため 伊〔せ〕語—おいぬれはさらぬわかれのありといへはいま〳〵見まくほしき君かな 古今／世の中ニさらぬ別のなくもかなちよもといのる人のこのため 此哥返哥也 伊勢（松・竜・内B・神・東本略同、但シ「古今」欠、又、松・東本「此哥返哥也伊勢語」、竜・内B・神本本「此哥返哥也伊勢物語」）

11 三八ウ8 ひるは見る事なかりけれは女いまたそのかたちをみる事なし—ひるは見る事なかりけれは女としころの中なれといまたそのかたちをみる事なし（松・竜・内B・神・東本同）

12 四三オ1 法皇おとろきていたきとゝめ給て—法皇驚ていたきとゝめたてまつり給て（松・竜・内B・神・東本）

13 四五ウ2 ときやう ◦読経也—ときやう 読経也 かゝる道の僧にてはふれなんする・や・らん 翦（松・竜・内B・神・東本略同）

若紫巻

14 五〇オ1 ◦はるなれはすかるなるのゝ郭公ほと〳〵いもにあはすきにけり 万—（引歌同、ソノ許ニ） 万

すかるはわかき鹿をいふ

15 五一ウ10 て〔な〕らひのはしめにもしけると—てならひのはしめにも此哥をなんしけると

16 五三オ12 ◦いとひてはたれかわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも 伊勢語—おもひ出はたれかわかれのこたからんありしニまさる今日はかなしも 伊勢物語／ゆくりなく 不意 ゆくりなく

末摘花

17 五六オ5 はれたりし□なかなるおもやう—はれしもなかなるなをしもかちなるおもやう

18 五六オ11 わりなくうは〔し〕ら□たる一かさねになこりなくゝろみたるうちきかさねて—わりなくうはらみたる一かさねニなこりなくしろみたるうちきくろみたるうちかさねて

19 五八オ4 ◦後撰云元長のみこになつのさうそくして〔お〕くるとて—後撰云元長のみことニ夏のさうそくしておくるとて

㈡

桐壺巻

1 六ウ7 安禄山といふ人いくさをおこして陳玄礼といふもの楊國忠ならひに楊貴妃—安禄山といふもの楊國忠ならひニ楊貴妃

2 八オ6 われかのけしきにてふしたれは—欠

3 一ウ11 たいえきのふようひやうのやなきもけにかよひ—大液の芙蓉ひやうの柳もけにかよひ（松・竜・内B・神・東本「たいえきのふようけにかよひ」）

4 三ウ8 たい〔え〕きのふようひやうのやなきもとかきてひやうの柳とい〔ふ〕一句□見せけちにせり—大液の芙蓉未央の柳もといふ一句を見せける残り

箒木巻

5 三オ12 ●〔す〕□ふによろし〔き〕もおほかり ●随分也—欠

6 二六オ9 ものゑんし ●怨也 □ねんに ●自然也—欠

7 二八オ1 箏のことをはむしきてうにしらへて／●盤渉調也—欠

8 三ウ1 なよ竹はにかたけ也 すへておれかたき性ある竹也—欠

空蟬巻

9 三四ウ5 ●ゆけたの事—欠

10 三五ウ3 むねうちたかれと御せうそこもなし—むねうちふたかれと

夕顔巻

11 四〇ウ9 いむ事のしるしにかうよみかへりて／◉戒也―いむことのしるし　戒也（松・竜・内B・神・東本同）

12 四一ウ9 ◉清水観音御哥―欠

若紫巻

13 五〇4 うとむ花のはな待えたる心ちしてみ山さくらにめこそうつらね―みやまさくらにめこそうつらね

末摘花巻

14 五四オ 輙擧酒〻罷輙擧詩―輙擧吟詩（朱）

15 五四ウ7 い□□□とせなかゝとゆ〔き〕すきかねてやわかゆかはひちかさのあめもふらなん云〻（京研本）―いもかゝとせなかゝとゆきすきかねてやわかゆかはひちかさのあめもふらなん云〻

等が(一)・(二)の特徴的な増補・刪節の大略である。次いで(三)は上記二項とはことなり、いわば本書の独自異文とも称すべき異同―本文・注共に―であるが、前両項のごとくには異例な変容はみられず、比較的細小なるものである。しかし、その顕出箇処は甚だ夥多に散見され寧ろ両書の異同は此の項に聚合しているので別註一括し、煩雑ながら寓目するに任せ細微にわたり掲示することにした。

如上、両本に瞰る顕著な相違―本文・注―のあらましである。

先ず、本書における増補箇処(一)―1～19について概要するに、本文のみの追補はすくなくして増注にともなうのであろう本文引用の遞増と共に重記衍文のごとき誤述―17・18―なども交えて次第に古鈔本系を離れ変容している。ことに類歌・引歌の補綴―3・4・5・10―のごときは其のきわだゝしいところでもある。その移ろいは漸増的なもの

ではあろうが、別註した補記等を併せ照合すれば既に同一系統上に伝流した伝本として措定することも躊われるほどである。しかも纔か本抄一巻の増補であることを思えば猶更である。

その変容は、同上記に附記した松平文庫本・竜門文庫本・内閣文庫B本・神宮文庫本・東大図書館本にも共有する傾向である。上記五本は若紫・末摘花の両巻を欠くが、以下のごとくに類同するのである。

本書が、右上記五本と同じくするのは記すまでもないことながら、1・2・3・4・6・7・8・9・10・11・13、の十一ヶ処と過半にも及び、その類同性は否みがたいものが存する。註附した本文細部にも一部に同じ傾向が辿られるのであり、ことに3・4・10の引歌に見る一致、6・8・13に代表されるがごとき、本文・注の増幅など、いずれの時期かにおける交流の跡を残すものであろう。又、注意されるのは上記五本に細補又は傍記されている「或本」の校合本文である。その「或本」は時に本書系とも異る本文―8―であり、時には慶應本・京大研究室本系本文―9―であって必ずしも同一ではないのである。その対校本は従って自ら慶應本系、又は本書本系とも相違する伝存本系であることが予測されるが同時に、それは又一方本書本文の系流をも規定していることともなっている。その五本については同解題にて後述するが、此の類同する一面と共に更に増・刪の両訂の手が加えられている。

上例㈠にかえって、他方、本書にのみ散見する異同、5・12・14・15・16・17・18・19、の八例である。しかし、それらは5にみる引歌の充補をのぞき、12・15・16における纔かな注文の変化にとゞまり、他は本書のみの書入れ―14・19―、又は重記衍文―17・18―であって、本書独自の増補はすくなく註附記した細部においても同様の動向にある。

次に、㈡刪節の部分、二―1～15については略述すると、その殆んどが欠脱・誤脱―1・2・4・5・6・7・8

・9・12・14・15であり、そのほか三例―10・11・13―は源氏本文の省略である。―こゝに、ひとこと、松平文庫本以下数本に於ける此の刪省は更に顕著な方向を辿って、本書とは相違している―。残る一例―3―は慶應本等古鈔本系に附記する見消ちの省略である。これに関聯付けてゞもあろうか4の刪節となっている。因みに松平文庫以下五本は前者3は本書とは別に同本文共に削除し且つ後者4はそのまゝに遺すがごとくに交錯していて、共に文脈の統一をかいているのである。既に末流本たるの要因は本書と共に処〻に露呈するの一面が認められるのである。後附の註記細部も又同じくするのである。

その㈢、両書の各本文独自の異同は別註に提示し附言したごとくに集中し小異を全てあげれば甚だしく夥多におよぶものであるが、その大部分は本書又は依拠本における錯誤・誤読、書写上の錯脱・誤写に帰因されるべき事柄に属する。上記同様の一面を如実に顕出されるのである。

とかく多くはその錯謬に帰せられるにせよ、此処―㈡―においても十余例にすぎぬとはいえ、慶應本・京大研究室本等との類似に比して、松平文庫本以下五本は共同し、交錯しながらに類縁関係を示唆しているのである。

次いで、本注の叙述様式と次第であるが、さきに慶應義塾図書館本の処にて、京都大学研究室本と比較において数例ではあるが掲示し、本書を含む他本にも言及したところであり、更なる贅言はさけ概要すれば、本書は細部にわたれば処〻に変位を散見するのであるが、近世期写本としては慶應本がとどめる古態、形式を比較的佳く継承し、類同している。その点では、㈡―(3)松平文庫本以下の五本に所見される本文（源氏）のきわだゝしい刪節のごときは極めて尠く、古鈔本の形相を伝えている一本として、上述の異同と共に参酌すべき伝存本である。

註　上記した本書の較著な異同は「紫明抄」を代表する慶應義塾図書館本とを相分つ特色を最も亮然と呈示する処であるが、一方又既述したごとくに本書の形迹をも残すものとして、以下に煩累ながら稍〻細部にわたり、その㈠・㈡につき任意、偶目するところに従い例示して本書に看る変移の様相をとらえ参考に供することにする。掲示方法は前例に倣い、上段は慶応本―但し、推定本文たる〔　〕符は参看夾雑なるにより省略した―下段は本書本文とする。但し、慶應本補註並びに前記解題中に挙げた京大研究室本との比較註記箇処は重記を避け省略する。併せ参照されたい。又、仮名遣い・附訓点等の細部については前例同様に除外している。

㈠

桐壺巻

四ウ11 うたかひなきにや（京研・京図・松・竜・内B・神・東本同―以下、「京研本以下諸本」ト略記）―うたかいは無にや、五オ2 延喜の聖代（京研本以下諸本同）―延喜の御聖代、六ウ12 ●よせ　縁也（京研・京図本同）―よせ　縁也　見日本記（松・竜・内B・神・東本同）、一ウ7 指碧衣女（京研本以下諸本同）―指碧女、一ウ8 為我謝太上皇（京研本以下諸本同）―為我太上皇、三ウ2 五條の三品の亭に（京研本同、cf京図本「五條三品俊成卿の亭に」、松・竜・内B・神・東本「五条の三位俊成卿の亭に」）―五条三品の亭に、一五オ7 ●拾遺云（京研・京図本同）―拾遺第九云（松・竜・内B・神・東本同）、一六ウ6 さえ品 ●才 ●伎（京研・京図本同）―さへ／才也　伎也（松・竜・内B・神・東本同）、二〇ウ7 たくみつかさなとにせんしくたりて（京研本同）―たくみつかさなとにせんしくたりて（京図・松・竜・内B・神・東本同、以下当該漢字ノ傍記省略ス）

箒木巻

二九ウ12 金光明最勝王経（京研本以下諸本同）―金光明経最勝王経、三七オ3 才智の勝たるを（京研本以下諸本同）―才智の勝たる事を、三一オ11 ●あはらなる也（京研・京図本同）―あはらなる也　くつろきかましき也（松・竜・内B・神・東本同）、三ウ4 止波利帳於毛多礼留乎於〻支美支万世（京研・京図本同）―止波利帳於毛多礼太留乎於〻支美支万世（cf松・竜・内B・神・東本「止波利帳於毛多礼太留乎於支美支万世」）

空蟬巻

三ウ10・うちはへて……（京研・京図本同）―うちはへて……後撰（松・竜・内B・神・東本同）

夕顔巻

元ウ2 日長月長溺人心（京研本以下諸本同）―日長月長〻溺人心、元ウ3 ●稔 ナリハヒ ●農 ナリハヒ（京研・京図本同）―稔 ナリハヒ 農 ナリヒハ 順和名（cf松・竜・内B・神・東本略同、但シ「農 同」「和名出」トアリ）、四オ4 いまこそはとおほすは（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本略同「……す」「は」ナシ）―いまのこそはとおほすは、四ウ7 とりなをしつゝみんも（京研本以下諸本同）―とりなをしつゝ見えんも

若紫巻

五一オ10 琵巴皷琴鳥舞魚躍―琵琶皷琴之時鳥舞魚躍（参照本文篇補註）、五一ウ10 おさなき人のてならひのはしめにもしけるとあ□（京研本）（京研本同）―おさなき人のてならひのはしめにも此哥をなんしけるとあり

末摘花巻

五四ウ10 またるゝ月いと心もとなきに（京研本同）―またるゝ月はいと心もとなきに、五六オ2 □（御）（京研本）のり物とみゆ（京研本同）―御のり物とそ見ゆ、五九オ5 ●男踏哥事 委細有初春（音）局（ヒ）（京研本補訂同）―男踏哥事 委細有初音哥巻、五九ウ2 □（神）（京研本）聲宛轉夢非夢（京研本同）―新声宛轉夢非夢 長恨哥

と、細微な部分を除けば尠く、寧ろ本文異同に集中する。

㈡

序

一オ4 つかさのすけにましはりて（京研・京図本同、cf松・竜・内B・神・東本「すけにましはりて」）―司のすけましはりて、一ウ8 なさしむるものなりかるかゆへに（京研本以下諸本同）―なさしむる物也故に

桐壺巻

二オ2 閑院左大臣（京研本以下諸本同）―院左大臣、二ウ12 御するのみこそ（京研本以下諸本同）―御末のみそ、三オ3 により て位を朱雀院の御子（京研本以下諸本同）―に依て朱雀院の御子、三ウ8 又仁明天皇（京研本以下諸本同）―仁明天皇、四オ12 又桐壺の巻に（京研本以下諸本同）―桐壺の巻ニ、五ウ2 陵上正殿便殿寝側之別殿、五ウ2 常権主衣裳（京研本以下諸本同）―権主衣裳、八オ1 ●吉住吉スミノエ 日吉ヒエ（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本「吉 住吉 日吉」）―吉 住吉 日吉、八ウ7 其於五月以上服親（京研本・京図本同、cf松・竜・内B・神・東本「於五月以上服親」）―其於以上服親、二ウ9 長恨哥傳（京研本以下諸本同）―欠、二六ウ7 あはれなるくをつくり給／●句也（京研本以下諸本同）―あはれなるくを／句也、二八オ1 候四位親王之次／依仰也（京研本以下諸本同）―候四位親王之／依仰也、二〇ウ5 人〳〵まかてちらす（京研・竜・内B・神・東本同）―人〳〵まてちらす（京図・松本同）

箒木巻

三ウ1 秋といへは……古今（京研本以下諸本同）―秋といへは……、三ウ1 たちそひもてあかめて（京研本以下諸本同）―立そひてあかめて、三ウ5 いうなり ●優（京研本以下諸本同）―優也、三ウ11 不下習 ケシウハアラス（京研・京図本同）―不下習（cf神本「不下習也」、松・竜・内B・東本「不下習也」）、三五ウ4 はけしきけたものゝかたち（京研・京図本同）―はけしきけた物かたち（cf松・竜・内B・神・東本「はけしきけたものゝすかた」）、三五ウ11 ことにわる物はをよはぬ所おほかる（京研本以下諸本同、但シ松・竜・内B・神・東本「幽仙窟文」欠）―ことにわる物はをよはぬ所おほかる（本書ニハ当該漢字等傍記スクナシ、以下省略ス）、三六オ6 ●支顎―支顎 ツラツヘック（京研・京図本附訓欠、松・竜・内B・神・東本「支顎 支顧イ」）、三八オ7 たまさゝのうへのあられ（京研本以下諸本同）―たまさゝのあられ、三八ウ5 ●さすらふたゝよふ也 ●伶傳也（京研・京図本同）―たゝよふ也 伶御也（cf松・竜・内B・神・東本「さすらふたゝよふ也 伶役也 傳イ 又流離」）

夕顔巻

四〇オ5 女御の母儀也（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本「女御の御母儀也」）―女御の母儀、四一ウ5 それこそよけれ花

をおるにも（京研本以下諸本同）―それこそよけれおるにも、四一ウ7 といふはきゝよかるへくや（京研本以下諸本同）―といふはよかるへくや、三八オ3 花の景にやすめるか□（こ）（諸本）とし（京研・京図・竜・内B・神本同）―花のかけにやすめることし（松・東本同）、三八オ6 心さかしうしをきたれと（京研本以下諸本同）―心さかしうきたれと、三八オ12 あけ方になりにけれは（京研本以下諸本同）―あけかたになりけれは、三九オ3 驚思へる事（京研本以下諸本同）―おとろき思事、三九オ11 はかられ給へかしと（京研本以下諸本同）―はかられ給へしと、四三オ5 蘇氏曰人生一世（京研本以下諸本同）―蘇氏人生一世、四五ウ8 不被如是十五種悪死（京研本同）―不被破（松本）如是十五種悪死也（京図・松・竜・内B・神・東本同）、四六ウ5 聲□（シヨウ）（朱）さゝれ候ぬれは（京研本以下諸本同）―声をさゝれぬれは、四六ウ10 このはふるいたる人（京研本以下諸本同）―このふるいたる人、四七オ4 かきをきたるかとも（京研本以下諸本同）―かきをきたるかと、四七オ9 心えられめとはかりにて申さるゝ（京研本以下諸本同）―心得られめとはかり申さるゝ

若紫巻

五〇ウ8 ひしりの御まもりにとて（京研本同）―ひしりのまもりとて、五〇ウ12 つほに御くすりともいれて（京研本同）―つほに歟ねくすりとを入て、五一オ8 ●琴 五絃也 加文武之緒者（京研本同）―琴 五絃也 加文武之緒、五一オ11 しりめに（京研本同）―しつめに（「……歟」ノ訂ママ見ユ、他ハ省略ス）、五二オ10 かへるへらなる（京研本同）―かへるへらなり（「る」「り」ノ書り歟体混ズモ他ハ省略ス）、五三オ4 風俗常陸哥也（京研本同）―風俗常陸也、五三オ5 やう〳〵（鈍色）おきゐて（京研本同）―やう〳〵（鈍色）おきゐて、五三オ6 火色（火色）紅也（京研本同）―火色也、五三ウ3 ●見わたせは……錦なりける（古今素性）（京研本同）―みわたせは……にしきなりける、五三ウ9 文選一（京研本同）―文選

末摘花巻

五四オ7 琴詩酒友……白氏（京研本同）―琴詩酒友……、五四オ11 人こそはあなれ（京研本同）―人こそあなれ、五五ウ8 ●

庄子云壽則多辱（イノチナカキモノハハチヲホシ）（京研本同）―庄子云壽則多辱、五九オ9 さえつるはるはとかろうして（京研本同）―さえする春はとからして、

如上いさゝか零細に掲示したが、更に助辞―一部例示ス―訓読、返点、声点、傍記、仮名遣等を拾掇すれば夥多におよぶのであるが、上記例のみにても明らかなごとくに他本と共通する処はわずか数例にかぎられて本書独自の本文状況を呈している。しかもそれらは転写における誤読、誤写、錯脱が過半を占めていて写本に屢〻紛起しがちな現象とはいえ必ずしも篤実な書写本とはいいがたい。

㈢

㈡は上記のごとくに経目する処を成可く網羅することにしたが訓点・仮名遣い・傍記等は其の一部を以て例示するにとゞめた。又、㈠・㈡と同様―補註・前掲書註記に掲出するところを除く―の拾掇方針によるものである。

序

一オ12 □□（もて）あそふくせつけり（京研本以下諸本同）―もてあそふよをつけり、一ウ2 才すくなけれは（京研本以下諸本同）―才すくなけれとも、一ウ9 むらさきの色をまし（京研本以下諸本同）―紫の色をきゝし

桐壺巻

二ウ11 醍醐の帝を例とせは（京研・京図本同）―酉酉の帝を例と申さは（松・竜・内B・神・東本同、但シ「さ」ナシ）、二ウ12 おはしまさゝりき（京研本以下諸本同）―おはしまさす、四オ5 左大将の自談には（京研・京図本同）―左大将の自嘆ニハ（cf松・竜・内B・神・東本「左大将自歎には」）、四ウ5 たてまつらるゝ所に（京研本以下諸本同）―たてまつる所ニ、五オ1 といふによらは桓武の時代（京研・京図本同）―といふにをそらくは桓武の時代（御代（松本以下））（松・竜・内B・神・東本略同）、五オ8 後漢書云以備内職焉（京研本以下諸本同）―後漢書云次備内職焉、五ウ4 生微矣（京研本以下諸本同）―生徴矣、六オ8 掌弔臨卿大夫之喪也（京研・京図本同）―掌云臨卿大夫之喪也（cf松・竜・内B・神・東本「掌云〻臨卿大夫之喪也」）、六オ10 さとかちなるを（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本ハ本文欠）―さとかうなるを、七ウ9 こうろうてんに（京研・京図本同、松・竜・

内B・神・東本略同「後涼殿」ト当該字傍記ス）―こりやうてんに、八オ4 なよ〳〵と（京研・京図本同）―なへ〳〵と（cf松・竜・内B・神・東本「いとゝなよ〳〵と」）、八オ12 三歳にして（京研本以下諸本同）―三歳ニテ、八ウ4 三月給暇三日（京研本以下諸本同）―三日給暇三日、八ウ9 三歳而喪母（京研本以下諸本同）―三歳而長母、一〇ウ12 はつかしう（京研本以下諸本同、以下音便省略）―はつかしく、一一ウ10 やうきひのかたち（京研本以下諸本同）―楊貴妃の貌（以下一一ウ12・一三オ4同）、一三ウ4 宮の御方を（京研本以下諸本同）―女三宮の御方を、一四ウ3 あしたに（京研本以下諸本同）―あらたに、一四ウ6 春宵苦短（京研本以下諸本同）―春宵若短、一五オ6 ●見具于令（京研本以下諸本同）―具見于令、一五オ8 えこのたひあはてのほり（京研本以下諸本同）―ゑこのたひはあはてのほり、一六オ2 至レ秦曰ニ典客一（京研本以下諸本同）―至癸曰典客、一六オ4 王弇改曰ニ曲楽一（京研・京図本同）―王莽改曰曲薬（cf松・竜・内B・神・東本「王莽改曰典楽」客或本）、一六オ5 胡廣漢官解詁云（京研・京図本同）―胡廣漢官解語云（cf松・竜・内B・神・東本、但シ出典叙次ニ異同アリ「胡廣漢官解譜」詁或本）、一六オ6 ゐてたてまつりたるに（京研本以下諸本同）―ゐつきたてまつりたるに、一六ウ7 あはれなるくをつくり給／●句（京研本以下諸本同）―あはれなるくを 句也（松本以下）、一六ウ8 ●和相（わかくにゝて見なれたる相と いふ心なり）（京研・京図本同、cf松・竜・内B・神・東本「大和相也 我国にてみなれたる相と云也」）―●和相（わかならて見なれたる 相といふなり）、一七オ6 覬覦者希望也（京研・京図本同、cf松・竜・内B・神・東本「覬覦之心者希望也」）―覬覦者希望也、一七オ8 后之言後／言在夫之後也（京研本以下諸本同）―后之言後在／吏之後也、一七ウ1 かゝやく日の宮ときこゆ（京研・京図・松・内B・東本同、cf竜・神本「かゝやくのの宮ときこゆ」）―かゝやく日の宮とかや、一七ウ7 第一間並円座……並西南又円座前置円座又其下並理髪具―第一間置円座……並西南又円座前置円座又其下置理髪具（「置」「並」ノ草体類似シ、因ミニ各本ヲ例示スルト、京研・京図本「第一間並円座……並西南又円座前置円座又其下並理髪具」ト慶本ニ同ジクシ、松・竜・内B・神・東本「第一間並円座……置西南並イ（或本）又円座前置円座又其下置理髪具或本」ト混ジテイル）、一八オ7 弁官分給所之史（京研本以下諸本同）―弁官分給所之史、二〇オ9 ●籠物（クタモノ也）●木物とも（京研・京図本同、但シ京図本「●籠物 クタモアリ」ト誤脱）―籠物（クタモノ）木物とも（cf松・竜・内B・神・東本「籠物也 クタモノナリ本 木物 菓子也」）、二〇オ10 にけならはつかしとをほしたり／…

……御とし四すき給へる事／をいうなり（京研本同、京図本ハ更ニ次行ニ「にけならはつかしおほしたり／●無似氣也」ト重記ス）―にけならはつかしとおほしたり／……御とし四すき給へる事をいふ也　にけなら　無似氣也（cf松・竜・内B・神・東本「……御歳四すき給へることを云也／にけならはつかしとおほしたり／無似氣也」）

箒木巻

三オ4　●隠事也（京研本以下諸本同）―陰事、三オ5　●又皺眉（京研本以下諸本同）―又〔響〕、三オ8　交野に一宿す（京研・京図本同）―交野に一宿事あり（松・竜・内B・神・東本同、但シ「に」字ナシ）、三オ5　をのかしゝこそ（京研以下諸本同）―をのかしたこそ（「〜歟」傍記、以下省略ス）、三ウ1　おひさきこもれるまとのうちなる程（京研・京図本同、但シ京図本「尖苗」ト傍記ス）―おひさきこもれる窓のうちなるほと／尖苗同（松・竜・内B・神・東本同）、三オ1　ま与み可通音故也（京研・松・竜・内B・神・東本同、京図本欠）―まとみと音可通故也、三オ6　きすなきかたのえらひに（京研本以下諸本同）―きすなきかたのはらひに、三オ12　〻以風刺上（京研・京図本同）―〻以風利上（松・竜・内B・神・東本同）、三ウ3　上為敬則下不慢（京研本以下諸本同）―上尊孝則下不慢、三オ11　●ひたすらと（京研本以下諸本同）―ひたすらに、三ウ10　なまうかひにては（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本本文省略）―なまこかひにては、三オ4　●ひゝちゐたり（京研本同）―ひゝらゐたり（京図本同、松・竜・内B・神・東本「ひゝらゐたり」）、三オ6　うそをかまふる時（京研本以下諸本同）―うそかまふる時、三ウ4　けたものゝかたち（京研・京図本同）―けた物かたち（cf松・竜・内B・神・東本「けたものゝすかた」）、三ウ9　たゝみなしけちかき（京研本以下諸本同）―たゝみなしけちかき（本書朱傍記少シ、以下省略ス）、三六オ4　はしりひき（京研本以下諸本同）―はしらひき、三六ウ2　伊世語（京研・京図本同）―伊勢物語（松・竜・内B・神・東本同）、三六ウ9　正身也（京研本同）―正見也（cf松・竜・内B・神・東本「正身」、京図本欠）、三七オ4　たはふれにくゝなん（京研本以下諸本同）―たはふれなくゝなん、三八オ5　おらはおちぬへき（京研本以下諸本同）―たゝはおちぬへき、三六ウ2　●草薬　蒜也（下辺双注モ「草薬之中／蒜」京研・京図本同）―草薬　蘇也、双注、「草薬之中蘇」（cf松・竜・内B・神・東本「草薬也　蒜

也　蘇也　或本」、双注「草薬中之蘇」)、三六ウ10 ◦知者言未必尽也(京研・京図本同)―智者之言未必愚也(松・竜・内B・神・東本「智者言未必愚也」)、三六ウ10 ◦老子経云(京研本同)―孝経云(cf京図本「孝子経云」、松・竜・内B・神・東本「孝少経云」)、三七オ8 皆酔らは(京研本以下諸本同)―皆酔と云は、三〇ウ1 令注進云天一方(京研・京図本同)―令注進去天一方(松・竜・内B・神・東本「令注進去天一方」)、三〇ウ2 庚寅日(京研本同)―庚申日(京図・松・竜・内B・神・東本同)、三一オ2 ◦茲也　御ましむしろ也―笈おましむしろ也(cf京研・京図本「◦茲也おましむしろ也」、松・竜・内B・神・東本「笈オマシムシロみまし」)、三一オ1 猶きかれける在伊世集(京研本同)―なをきかれぬる在伊勢集(京図・竜・内B・神本同、cf松・東本「なをきかれける在伊勢集」)、三一ウ3 ありしながらの(京研本以下諸本同)―あつしながらの、三一ウ5 のちに又(京研本以下諸本同)―のちもまた、三一オ4 うしろみまうけて(京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本本文欠)―うしろさまゝけて、三一オ9 有とは見れと(京研・京図本同)―ありとはみえて(松・竜・内B・神・東本同)、

空蟬巻

三四オ11 いそかはしき也(京研本以下諸本同)―いそかしき也、三四ウ7 七十七たんなり(京研本以下諸本同)―七十七たんなりニ、三四ウ8 五百三十九歟(京研・京図本同)―五百二十九歟(cf松・竜・内B・神・東本「五百三十九歟」)、三五ウ2 なき恋を(京研本以下諸本同)―なき物を、三五ウ5 ことつてもなし(京研本以下諸本同)―つてこともなし、三五ウ6 ありしながらの(京研本以下諸本同)―ありしあからの、三五ウ6 とりかへす物ならねと(京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本本文欠)―とりかへす物ならはと

夕顔巻

四〇オ5 母儀也(京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本「御母儀也」)―母儀、四〇オ8 申されけるとそ(京研本以下諸本同)―申されけるとなん、四〇ウ4 されたはふれたるかことし(京研本以下諸本同)―されたはふれたる如し、四〇ウ7 たきしめたるか(京研・京図本同)―たきしめたる(松・竜・内B・神・東本傍記「或本云」同、上掲本注本文異同多し、後述)、四一オ2

かたほなるをたに（京研本以下諸本同、京研本声点存補注参照）—かたほそなるをたに、三元オ7 そのをゝしるへにて（京研・京図本同）—そのをゝしるしにて（松・竜・内B・神・東本同）、三元ウ11 季夏蟋蟀（京研本以下諸本同）—季夏蟋蟀（秋）、四三オ5 朝露之託於桐葉耳（京研・京図本同）—朝露之詫於桐葉耳（cf松・竜・内B・神・東本「朝露之詫於桐葉不」）、四三オ5 與幾何—其與幾何（京研本以下諸本同）、四三オ12 はねをかはさんなとは（京研以下諸本同）—はねをかはさんかとは、四三ウ1 いとこちたし（京研本以下諸本同）—いとこそたし、四三オ11 けちかき前栽なと（京研本以下諸本同）—けるかき前栽なと、四四ウ7 すくす心ちし給（cf京研本「すこす心ちし給」、京図本「すこす心ちして」）—すくる心ちし給（松・竜・内B・神・東本同）、四四ウ8 ●くるゝまは（京研本以下諸本同）—かへるさは、四五オ6 兒近来患癩（京研本同）—兒近来患嗽（cf京図本「兒近来患癩（来或本）、松・竜・内B・神・東本「兒近衛患癩」）、四六オ1 つほねなとけちかくたまはせて（京研本以下諸本同）—つほねなとけなくたまわらせ、四六オ2 かたちなと□□らねと（京研本以下諸本同）—かをなともよからねと、四六オ6 まうてゝ（京研本以下諸本同）—まうて、四六う1 あるへく候覧（京研本以下諸本同）—あるへからん、四六ウ4 人と思て（京研・京図本同）—人と定て（cf松・竜・内B・神・東本「人と定て」）、四六ウ12 かたちとは見えす（京研以下諸本同）—かたちとは見えす候、四七オ3 人のさとりを（京研本以下諸本同）—人のまとひを、四七ウ1 和名以閇波土（京研・京図本同、但シ京図本声点欠、松・竜・内B・神・東本「土」ヲ「上」ニ作ル）—和名 以閇婆、四七ウ10 かひなしや（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本本文欠）—かひなきや、四八オ2 御ふみの師にて（京研・京図本同、松・竜・内B・神・東本本文欠）—御ふみのしたて、四八オ3 御文師也（京研本以下諸本同）—御文所也、四八オ7 かのこうちき（京研本以下諸本同）—かのこゝちき

若紫巻

四九ウ1 すてわすれきて給（侍を）—すてわされきて侍を（京研本略同）、四九ウ6 文集／悟真寺詩（京研本同）—文集語真寺詩、四九ウ10 鞍馬寺なとにやと見る程に（京研本同）—鞍馬寺なとやのほるか、五〇ウ5 よめる也（京研本同）—よめり、五一オ2 ●覺忍（山）（京研本同）—山覺忍、五一オ2 不見太子傳如何（京研本同）—太子傳ニ／不見如何、五一オ5 えのはゐに（京研本同）—ひのゝ（えのはゐ）

ねも（に歟）、五一オ11 しりめに見をこせ給（京研本同）―しつめに見をこせ給、五一ウ4 よのまのかせも（京研本同）―よのきの風（ま歟）も、五一ウ8 これはまた（京研本同）―これはこた（ま歟）、五三オ4 かけはなるらん（京研本同）―かけはなからん（り歟）、五三ウ7 心にまか□て（せ（京研本））るてはふらかし（京研本同）―心にさかせてゐていふらかし（は歟）

末摘花巻

五四オ9 一弾慥中心（京研本同）―弾慥中心、五四オ10 猶恐中有間（京研本同）―猶恐中有問、五四ウ11 戀れはくるし（京研本同）―はふれはくるし、五四ウ12 おほとかなる（京研本同）―おほよかなる、五五オ9・10 律書圖（京研本同）―律音圖、五五ウ2 不得臣麁用之故云（京研本同）―不得臣齊用之故者、五五ウ4 遺杯乃知唐已有祕色（京研本同）―遺鈷乃知庚已有祕色、五五ウ6 大宿の傍也（京研本同）―大宮の傍也（大宿この□）、五六オ2 □（御（京研本））のり物とみゆ（京研本同）―御のり物とそ見ゆ、五六オ2 たかくのひらかに（京研本同）―たかくのひよるに、五六ウ4 王曰藝服……藝尚不正……藝／息刑反下同（京研本「王曰藝服……藝尚不正……藝息利反下同」）―注曰藝服……藝尚正……息列反、五六ウ10 きぬには二寸はかり（京研本同）―きぬうらは二寸はかり、五七ウ3 なにたつすえの（京研本同）―なみたつすゑの（ママ）、五七ウ3 こえぬ日そなき（京研本同）―こえぬまそなき、五七ウ9 霜雪白紛〻（京研本同）―霰雪白紛〻、五七ウ9 悲端与寒氣（京研本同）―悲端而（ママ）寒氣、五九オ8 さしおかれて（京研本同）―さしをかれ給、五九オ10 かろうしてわなゝかし（京研本同）―からしてわなゝかし、五九ウ7 みえ給へり（京研本同）―みえたり、五九ウ10 みちのくのまゆみ（京研本同）―みちの國のまゆみ

と、本書は慶應義塾図書館本との異同は前掲(一)・(二)に較べて集中している。しかも比校本たる京大研究室本・同図書館本―慶應本解題の註記は除く―とは類同するところ極めて尠く、巻第編成を同じくする松平文庫本以下五本とも共通する処は纔かに十余例を散見するにすぎない。しかも、それらは本書独自本文と云うべくは間〻散点するにとゞまり、その過半は(一)・(二)同様に本文・注ともに錯謬・誤読に起因する誤写・誤脱であるのが一目判然とする。内・外典等の漢文体はもとより和文の草体の錯誤も甚だ顕著である。しかし、掲示は一部にとゞめたが、「〜歟」「本ノマヽ」のごときの附記を屢〻所見するのをみると既に依拠本によっての就錯でもあったのであろう。たゞ此処でも目にとまるのは、松平文庫本以下五本に見出される「或

本」と校記する対校本文である。本書は本論にても述べたごとくに上記五本とは類同する一面を留保しながらに且つ一方において異同対峙して別系をなしているのが、上掲例にてもあきらかである。又、上記の例示、一・二例にすぎぬが傍記注文の本行化も見逃しがたく明証し得るものとは別して古鈔本系の増幅してゆく経過の一端を予測するものではなかろうか。

京都大学国語学国文学研究室蔵〔南北朝末〕写　存十巻

綴葉装、十帖。橙色地花紋金繻裂表紙（改装）、竪二五・〇糎、横十七・七糎。見返し、布目金紙。料紙、厚手斐・楮交漉紙。字面高さ約二十三・七糎、釈文一字下げ。毎半葉十行。墨付丁数、第一冊　五折（五十六丁）、第二冊　四折（四十三丁）、第三冊　二折（二十五丁）、第四冊　二折（二十五丁）、第五冊　二折（十九丁）、第六冊　二折（十八丁）、第七冊　四折（三十八丁）、第八冊　二折（二十五丁）、第九冊　三折（二十七丁）、第十冊　三折（二十七丁）。

本書には右記表紙の改装時のことであろう、料紙の天地左右が裁断され、殊に地部には、その切除が本文に及ぶところが間〻散点され、薄墨補筆としている。[註一] 同影印本にても判別される。この補筆は切除箇所のみならず他の本文中にも纔かではあるが見出される。

本書の書写年代についてゞあるが、夙に吉澤義則氏が「紫明抄開題」[註二]に於て、

本書の伝本のうちで云〻……紙質・書体明らかに鎌倉時代のもので、諸伝本中最古にして、且つ詳正なる善本であって、原本でないまでもそれに近いもの〻如くである。

と、その時代を推断されている。「詳正なる善本」、「原本……それに近い」伝存本であるのは掲出伝本解題中にも述べたごとくであるが、その書写年代に関しては疑義が存し、その躊いを拭いがたい。あえて異をとなえるところではないが、翻って同書の一枚一枚を繙閲するに、その紙質・墨痕は却って時代を南北朝も末頃、あるいは室町期にも

さしかゝるがごとき感触、心象が残るのである。その書跡・体の古雅なるは否定しがたくも、この期を遠く遡るとは想定しがたく、親本からの書承が、その筆跡・書体にまで及んだのではないか、と私案を提起して更に精査を期すことにする。

又、本書の筆跡に関してゞあるが、数年前、披閲の折に各冊の書体を対照するに、その筆写者は複数の手跡が所見され、今あらため影印本を検するも、「紫明抄巻第八」の一巻は他巻とは明らかに別筆と判断されるのである。往時のメモより附言すると、(1)同巻第一・二の両巻及び同巻第六・七の両巻と、更に或は尾部同巻第九・十の両巻を加えて同筆、(2)同巻第三・四・五の三巻、(3)上記巻第八の一巻、のごとき印象を誌している。大まかな推測にすぎず、書写時の筆墨の差異による結果とも一方に考慮すべきは当然ながらも猶本書の書写者は二・三人の手になる寄合書きであるかと想定しておくことにする。旧蔵者の印記等はなく、その伝来は未詳である。

本書は、上掲の慶應義塾図書館本と共に、伝存本中の最古鈔本のひとつにして且つ完本であり、而も既述したごとくに紫明抄の原態に近きを保全している最善本たることは言及するまでもないが、猶慶應義塾図書館本との比校に於て看るごとくに間〻書写上の瑕瑾が散見され相互補完の関係にある。慶應本は本書とは巻第編成を異にするが内容・形態共に極めて近似するのはさきに縷述したところであるが、該本は巻第一―自桐壺巻至末摘花―の零巻にすぎず、以下の実体を辿るべくもないので、此処に紫明抄を代表する一本として、巻第編成を主にその形態を一括し掲示することにする。

第一冊　●紫明抄序　●紫雲寺隠侶素寂撰　○紫明抄巻第一　自桐壺巻至夕顔巻　●光源氏物語巻第一　桐壺（キリツボ）　一名壺前栽（ツボセンサイ）　●

光源氏物語巻第二箒木（ハハキ）　●光源氏物語空蟬（ウツセミ）　箒木並一　●光源氏物語夕顔（ユウカホ）　箒木並二　一交点了（朱、巻尾）—京図本「●紫雲寺隠侶素寂　在判／一校早」ト奥書アリ—

第二冊　○紫明抄巻第二　自若紫巻　至賢木巻　紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第三若紫（ワカムラサキ）　●光源氏物語末摘花（スエツムハナ）　若紫（ワカムラサキ）並　●光源氏物語巻第四紅葉賀　●光源氏物語巻第五花宴（ハナノエム）　●光源氏物語巻第六あふひ　葵　●光源氏物語巻第七さかき　賢木　●光源氏物語巻第八はなちるさと　花散里—京図本、巻第二欠巻

第三冊　○紫明抄巻第三　自阪磨巻　至関屋巻　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第九阪磨　●光源氏物語巻第十明石（アカシ）　●光源氏物語巻第十一澪標（ミヲツクシ）　●光源氏物語蓬生　十一の並の一—京図本「澪標（十一の）並の一」　●光源氏物語関屋（セキヤ）　十一の並の二　紫雲寺隠侶素寂—京図本「澪標（十一の）並の二」「●紫雲寺隠侶素寂　判／明徳第四仲呂初二　書写早／侍中蘭臺藤／應永十七年十月　日　書写校合早」ノ奥書アリ—

第四冊　○紫明抄巻第四　自繪合巻　至未通女　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第十二ゑあはせ　繪合—京図本「ゑあはせ」ノ四字欠—　●光源氏物語巻第十三まつかせ　松風　●光源氏物語巻第十四うすくも　薄雲　●光源氏物語巻第十五朝顔（アサカホ）　●光源氏物語巻第十六をとめ　未通女—京図本「●紫雲寺隠侶素寂判／應永十七　十八　書写校合早」ト奥書アリ—

第五冊　○紫明抄巻第五　自玉鬘巻　至篝火巻　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第十七たまかつら　玉鬘　●光源氏物語はつね　初音　玉鬘並一　●光源氏物語こてふ　胡蝶　玉鬘並二　●光源氏物語螢（ホタル）　玉鬘並三　●光源氏物語とこなつ　常夏

玉鬘並四　●光源氏物語かゝりひ　篝火　玉鬘並五—京図本欠巻—

第六冊　○紫明抄巻第六（自野分巻至藤裏葉）　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語のわき　野分　玉鬘並六　●光源氏物語みゆき　御幸　玉鬘並七　●光源氏物語ふちはかま　蘭　玉鬘並八　●光源氏物語まきはしら　柱　玉鬘並九　●光源氏物語巻第十八むめかえ　梅枝　●光源氏物語巻第十九ふちのうらは　藤裏葉—京図本欠巻—

第七冊　○紫明抄巻第七（自若菜巻至鈴虫巻）　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第二十若菜上　若菜下　●光源氏物語巻第二十わかな下　若菜下　●光源氏物語巻第廿一かしはき　柏木　●光源氏物語巻第廿二によこふえ　横笛　●光源氏物語すゝむし　鈴虫　横笛並—京図本欠巻—

第八冊　○紫明抄巻第八（自夕霧巻至竹河巻）　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第廿三ゆふきり　夕霧　●光源氏物語巻第廿四みのり　御法　●光源氏物語巻第廿五まほろし　幻　●光源氏物語巻第廿六くもかくれ　雲隠　もとよりなし　●光源氏物語巻第廿七匂兵部卿宮　一名薫中将　●光源氏物語こうはい　紅梅　匂宮並一　●光源氏物語竹河　匂宮並二—京図本欠巻—

第九冊　○紫明抄巻第九（自橋姫巻至寄生巻）—京図本「寄木」ニ作ル—　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第廿八橋姫一名優婆塞　宇治一　●光源氏物語巻第廿九椎本　宇治二　●光源氏物語巻第三十あけまき（総角）　宇治三—京図本「総角」ニ作ル—　●光源氏物語巻第卅一さわらひ　早蕨　宇治四　●光源氏物語巻第卅二やとりき　寄生　一名かほとり（貝鳥）　宇治五—京図本「寄木　一名かほとり」ニ作ル、又尾ニ「紫雲寺隠侶素寂／一校了」ノ奥書アリ—

第十冊　。紫明抄巻第十　自東屋巻至夢浮橋　●紫雲寺隠侶素寂撰　●光源氏物語巻第卅三あつまや　東屋　宇治六　●光源氏物語巻第卅四うきふね　浮舟　宇治七　●光源氏物語巻第卅五かけろふ　蜻蛉　宇治八　●光源氏物語巻第卅六てならひ　手習　宇治九　●光源氏物語巻第卅七ゆめのうきはし　夢浮橋　一名法の師　宇治十　紫雲寺隠侶素寂（巻尾）―京図本「●紫雲寺隠侶素寂　判／本云　此抄一部十巻　悉以素寂自筆本書写早而此巻／粉失之間後日書加之奥一段作者素寂自筆也／不慮自文書中撰出故続加巻中者也／于時貞治四年季春十七日　特進　判／応永十七年十一月日　書写校合早」ノ奥書アリ―

又、本書は巻尾署名の上欄余白に、

ひかりあることのはをのみ／かきとめはわかのちのよの／やみはまよはし

君をのみたのみそめたるみつくきの／あとゝむ（ママ）へきしるへあらせよ―京図本、上掲二首欠―

と、両詠を附載している。

以上、本書の編成につき詳記したが、「紫明抄」十巻の結構は本書並びに京大図書館本にみるごとく、書名・撰者名―各巻首・尾（但し巻尾署名は京大図書館本には各巻に予想されるに比し、本書は巻第三・十の両巻尾二巻にとゞまり、不審）―、源氏物語五十四帖を並巻を排しての全三十七巻に構成して完備する最終形態をとゝのえているのである。附註した京大図書館本の奥書に云う「悉以素寂自筆本書写早而此巻／粉失（ママ）之間後日書加之奥一段作者素寂自筆也」の記は同書が本書と略同様の内容又古態をとゞめる叙述形式よりみて信憑性ある記述であろう。ともかくも慶応義塾図書館本以下、他本に看取される編成とは一部を相違するにせよ、本書は定稿としての巻第編成の完結を示すものであろう。全十巻〻尾に附載歌二首を添えているのも又その意を含めてのものであろう。

既に再三にわたり縷述したところであるが、慶應義塾図書館本は内容・叙述形態、又その他細部にわたり、本書とは極めて近似、隣接する最古鈔本である。しかるに、その巻第編成は、巻第一を「自桐壺巻至末摘花」を以て構成しているのは如何に措定すべきものであろうか。該書は存一巻の零本にすぎず、この系統上の伝本、内閣文庫A本も同様にして他巻の編成は推断すべくもないが、島原松平文庫本以下東大図書館本等五・六（岸本巻第九存）本の系統は後述するごとくに明らかに内容上系類を異にするが、巻第一の編成は慶應義塾図書館本系と同じくし、且つ他巻—但し巻第二欠巻—の編成は京大研究室本系と全く一致していることは留意されるのである。結句巻第一の編成にかぎり、その結構をあらためたにすぎないことである。しかし、この巻第編成は編者素寂を措いて余人の改むべき事柄とは想定しがたい。とすれば、本抄完稿時に何等かの事情によって、京大研究室本系か、慶應義塾図書館本系の編成のいずれかに、その内部に加減をはからうことなくして改編した経過が存したのではなかろうか。いずれが原態かの先後は猶判断を躇うところであるが、両書共に内容上の決定稿に拠り転写又は再転写された古鈔最善本というべきであろうかと推論されるのである。それ故にこそ両書は緊密に相接し、且つ古態を佳く保つものと、想定されるのである。

その改編の理由は記したごとくに推測すべくもないが、書冊仕立上のことにもあろうが[註三]、やはり、桐壺・箒木・箒木並一・二（空蟬・夕顔）を以って紫明抄巻第一を構成し、次巻は若紫・若紫並（末摘花）以下賢木迄を次巻として結構するのが、最も然るべき妥当な編成であると再案した結果ではなかろうか、と想像され、この仮定にたてば京大研究室本が改訂編成本となることになろう、が猶決論しがたい。

本書の伝存本中に於ける処次は右記のごとくに措定して大略は誤りなきかと考えるのである。最も近似する慶應義塾図書館本との本文比校対照の一覧は同解題に附註したので明らかなとおり、その異同は極めて尠い。纔か同抄一巻

の部分にはすぎないが、おおよそ他巻もこれに準ずるものであろうかと推測されるのである。

猶、本書に施されている朱筆は、附訓・返り点、当該漢字の傍記、四声・清濁点、文頭符、釈文部の符、竪点、見消ち、朱引等は全巻にわたっている。又、一部ではあるが、朱筆オコト点が施されている処が見出される—例えば、同抄巻第六、御幸巻「●鷹事 日本記」の当該所引本文のすべてにわたり所見されるなどがそれである—。それら朱筆の符、●符、返点、と共に間〻墨筆も混りあい、時に朱墨附訓の重層も散見され、その附点の経緯は、巻第一巻尾に「一交点了（朱）」とある時か否かは既に判別しがい。しかし、これとは別に補註例記した、改装時、裁断後の補筆と同じくするか、薄墨にて補訂する処も看取され、わずかながらも書写後の加筆は別して対処すべきであろう。

本書「紫明抄」十巻の巻第二以下については、京都大学図書館本以下、松平文庫本系諸本の当該巻箇処にて言及、後述することにして、ひとまず本書解題は、その概要を以てとゞめることゝする。

註一　此処に一例を掲示する。同抄巻第二、賢木巻三六丁裏3行は

●よにふれは云〻……みちふみならしてん 古口、とあり、「今」字裁断、「古口」別筆見消ち、別筆「古今」と補写する。

同裏の9行は

たまのきすにおほさるゝも云〻……おそろしうおほえ給なりけ〔り〕、「けり」別筆見消ち、別筆「けん」補写する。

又、同裏10行、細注には

●玷此字をたまのきすとよむ□／□、「よむ□／□」を別筆見消ち、別筆「よむ也」と補写する。

かゝる処が処〻に散見されるのであるが、上例中、後二例などの如き再吟味を必要とするもあり留意される。

註二　吉澤義則氏　「未刊国文古註釈大系」第十冊所収　昭和十二年

註三　島原松平文庫本以下、同系五本には、桐壺巻〻尾に、素寂署名の次と奥書末に重ねて「箒木同並巻依枚数多別書之」（奥書末）と記している。この記の位置からして、素寂の冊子書写上の数量的制約を附記したものと推測される。現存諸本も十冊仕立、五冊仕立、とする伝本が主であるが、その冊数はともかく上記五本は箒木・箒木並一・二（空蟬・夕顔）を一冊に予定し、若紫・若紫並（末摘花）を次冊に排していたと推定されるが、現在本系統紫明抄巻二の若紫以下花散里を、共に欠巻としている。それは、一方やはり数量的にみての別冊であったのであろう。が、上述の並巻統一による主たる改編理由と共に、他方、この量的制約も併せ配慮すべきことも存したかと思われるのである。

京都大学附属図書館蔵應永十七年奥書〔室町後期〕写　存巻第一・三・四・九・十

袋綴、三冊。薄鼠色地墨胡蝶紋絹表紙（後補）、但し後表紙、朱色絹表紙、竪二十六・九糎、横二十二・四糎。見返し、茶褐色地金砂子散し。料紙、薄様斐楮交漉紙。字面高サ約二十四・〇糎、釈文一字下げ。毎半葉十二行。墨付丁数、第一冊　五十九丁、第二冊　五十二丁、第三冊　五十一丁。

外題、欠。内題・巻第構成の詳細は京都大学研究室本に併せ一覧した。各冊の編成を略記すると、

第一冊　◎紫明抄序　◎紫明抄巻第一（自桐壺巻、至夕顔巻）　第二冊　◎紫明抄巻第三（自阪磨巻、至関屋巻）　◎紫明抄巻第四（自絵合巻、至末通女）

第三冊　◎紫明抄巻第九（自橋姫巻至寄木巻）　◎紫明抄巻第十（自東屋巻、至夢浮橋）

とあり、巻第二・五・六・七・八、の五巻を欠落している。

奥書は第一冊、巻第一の巻尾に、

紫雲寺隠侶素寂　在判　／　一校早

第二冊、巻第三の巻尾に、

●紫雲寺隠侶素寂 判」

明徳第四仲呂初二　書写早　／　侍中蘭臺藤

應永十七年十月　日　書写校合早

同冊、巻第四の巻尾に、

●紫雲寺隠侶素寂 判

應永十七　十　八　書写校合早

第三冊、巻第九の巻尾に、

紫雲寺隠侶素寂　／　一校了

同冊、巻第十の巻尾に、

●紫雲寺隠侶素寂 判

本云 此抄一部十巻　悉以素寂自筆本書写早而此巻／粉失(ママ)之間後日書加之奥一段作者素寂自筆也／

不慮自文書中撰出故續加巻中者也」

于時貞治四年季春十七日　特進 判

應永十七年十一月　日　書写校合早

と誌している。欠巻部にも又然るべき奥書は存したのであろうが、同系本のなきにより推すべくもない。

又、第一冊見返しに、大振りな押紙を貼付し、

紫明抄十巻　内五巻雛本（ママ）合冊／素寂ハ源親行ノ子
ニ而貳冊不足

。應永拾六年より寛政九年まて三百八十／九年ニなる古代之本製見るへし

と四行に添書（寛政九年）している。又同押紙の左傍に、

原本無表紙なりしかは原形を失なはさる様表紙を附帙を添ゆ　「其中／書屋」（朱印）

と、本書の改装につき其中堂書屋の寸記が附されている。

右奥書は、本書の書写伝来の経由を一応、その大よそは伝えている。巻第十の尾に誌す奥書は、貞治四年（1365）、特進某の書写本十巻は「悉素寂自筆本」であり、「此巻（巻第十）」を紛失するにより、後日追補したというのである。続く「奥一段作者素寂自筆也」の記は次の「不慮自文書中撰出故続加巻中者也」と説明しているのではあるが、稍〻文脈不明にて具体的にいずれを指示するかはやはり確認しがたい。が後半一部の一段は文書の中より撰び出して補写部分に継ぎ足したとでもいうのであろうか。いずれにせよ、此巻を除き素寂自筆本に依拠したことを明記せんとしたものであろう。紫明抄成立―永仁二年（1294）とする―から既に七十余年を経しているのではあるが。次に看る、明徳四年（1393）仲呂、侍中蘭台藤某の書写につゞき應永十七年十・十一月（1410）某書写と、再度の転写は隣接していて転写関係は奥書の経過どおりであろう。しかし、こゝで貞治四年書写奥書に誌す「本云」の記は後者の明徳四年・應永十七年の両書写の親本か否かは結論しがたい。唐突に巻第十の素寂署名と應永十七年書写校合の間―余白―に記載されているのも疑えば校合本の奥書転載とも臆測されなくもない。結句本文照合の上にて、その系統をみるのほかはないであろう。結論をおおまかにしめくゝれば京大研究室本に近く、同系統上のやゝ崩れた一本であり、一方の慶應義塾図書館本と共に、次いで原紫明抄に近い関係にあるといえようか。

本書の書写年代についてゞあるが、多くは巻第三・四・十の巻尾「應永十七年十（十一）月」の書写校合の記をもって当てゝいる―押紙（寛政九年）以下―が、紙質・墨痕・書風等、一般の通念より検するも疑わしく更に此の期を降る、室町後期の同奥書転写一本であろうかと推察される。

扨、その本書の内容、本文についてゞあるが、まず巻第一から検討することにする。さきに慶應義塾図書館本解題において京大研究室本との顕著なる異同を拾い掲示し、併せて本書以下披閲諸本とを対照し追記したのであるが、そのかぎりにあっては、慶應義塾図書館本に対し両本―本書・京大研究室本―は相反するところは尠くして、本文異同―(イ)～(ヘ)（自桐壺至夕顔、参照9～11頁）の六項中、(ホ)・(ヘ)の京大研究室本の誤写をのぞけば共通し、又、叙述次第の一例―参照12頁―も同一である。たゞ京大研究室本に看取される重複本文―これも書写のあやまりであろう―(ア)～(ウ)、参照16・17頁―の三例は本書においては訂されているのが着目されるところである。巻第編成も上記のごとくに同じくするのは勿論のこと、翻印補註、又、同解題に註記した細部の本文比較にも見るごとくに両書本文はきわめてよく類同していることが推定されるのである。

しかし、本書も仔細に看ると、本書独自の、(一)誤脱・省略、(二)増補、(三)重複、等の本文が散見されるのである。記すまでもないが、次に上述以外の、本書に見出す慶應義塾図書館本との比較的顕著な異同を以下に掲示し前者と共に本書巻第一の概要をみることにする。

先ず、その(一)誤脱・省略本文又釈文

1　うきよをいとふはかり事あさくうらめしきかな―欠　序一オ7行（慶本丁・行数、以下同）　諸本存

2　●やへむくらしけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり　拾遺／恵慶―欠　桐壺巻一〇ウ6行　諸本存

3 をもゝろこしの哥をもたゝそのすしをそまくらことにせさせ給―欠　同二オ12行（行字以下省略）　諸本存

4 ●位はかりにて無官を非参議といふ―●無官なるを非参議といふ　箒木巻三オ3　内A本「位はかりにて無官なるを非参議といふ」、京研本「●位はかりにて無官なるを非参議といふ」、但シ「位はかりにて」の左傍墨見消チヲ朱筆ニテ重ネテ見消チトス、松本以下五本「無官を非参議と云也」

その(二)増補

1 あさかれゐ／●朝餉間在清涼殿／たいしやうし／●大床子のおものは……―あさかれゐ　朝餉者朝供御也／●朝餉間在清涼殿／たいしやうし　大床子夕供御也／●大床子のおものは……　桐壺巻一四ウ7～10　京研・内A本ハ慶本同、松本以下五本ハ京図本略同、例示スルト、「あさかれゐ／朝餉　朝供御也　朝餉間　在清涼殿／たいしやうし／大床子者　夕供御也　大床子のをものは……」ト表記ス

2 ●勞也―●勞也　煩悩（身ヲイタツカハシウシ心ヲイタツカハシウス）　同一八オ12　諸本、慶本同

3 ●脇足也―●脇足なり　けうそくをおさへ　よろつ（代）。の花のさかりは御らんしつゝら（ママ）　後撰　箒木三オ5　京研・内A本ハ慶本同、松本以下五本ハ「脇足也／けうそくをおさへてまさへよろつ代の花のさかりは御覧しつゝ（此句如本　をこゝろしつかに）ら　後撰」（竜・内B・神本）（東本同）ト一首アリ、本書ハ稍〻小字にして余白ニ増補セルモノ歟

4 ●上童　侍童也―●上童　侍童也（昇殿の時うへわらはといふ）　夕顔巻四オ2　京研・内A本ハ慶本同、松本以下五本、本書同

5 ●万歳身後抄云喪家佛事次第―葬送以前無音念佛事／●万歳身後抄云喪家佛事次第　同四五オ11　京研・内A本ハ慶本同、松本以下五本、本書略同、但シ全本行ナリ、又尾部「…次第事」トス

次に(三)重複箇処

5′ 女君はすこしすくし(過也)給へる程□(に)いとわかうおはすれ〔は〕にけなう(無似気)はつかし〔と〕をほしたり／●源氏君十二歳……御とし四すき給へる事／をいふなり— 女君はすこしすくし(過)給へるほとにいとわかうおはすれはにけな(無似気)うはつかしとおほしたり／源氏君十二歳……御とし四すき給へることをいふなり／にけなうはつかしとおほしたり／●無似気也 桐壺巻三〇オ10 京研本ハ慶本同、内A本「にけなう(無似気)」ノ傍記ヲ欠キ、慶本尾ニ「にけなう 無似気也」ト一注項目ヲ附ス、松本以下五本「女君はすこしすくし(過)給へる／源氏君十二歳……御歳四すき給へることを云也／にけなうはつかしとおほしたり／無似気也」ト京図本ト略同

のごときが看取される。

又、次のごとくに、増補をも混じ叙述次第を異にする処も瞥見される。

6′ ●敦慶親王〔亭〕子院第四子母同延喜二品式卩卿延長八年二月廿八日薨 号玉光宮好色無双美人也 延長八年二月廿八日薨 年〻 箒木巻三一オ3 京研本ハ慶本略同、但シ、「薨」下ニ「年」字アリ、又「玉光」ヲ「光玉」ニ誤ル、又、内A本ハ叙述次第ヲ稍〻異ルモ慶本ト同ジクスルガ「薨」下ニ「年」字アリ、松本以下五本ハ本書略同、但シ「号玉光」以下双行ヲ本行トシ、又「母皇太后宮温子」ト「宮」字アリ、且ツ「延長八年」ヲ「延長八年(長或本)」ト傍校スルノホカ、「廿八日薨 年〻」ヲ「廿八日薨卒」ト小異ヲ看ル

●敦慶親王 亭子院第四子 母皇太后温子 延長同服也二品式部卿 号玉光宮好色人也

と、大略如上が主なる処である。右の掲示のかぎりを看ても其の異同は纔かな変化にすぎない。

その(一)の欠脱は、1〜3は諸本に存し、明らかに本書—又は依拠本—の書写上の誤脱である。4は慶應義塾図書館

本又は京大研究室本にみる見消ちの採否のことがらとして対処されるものである。又、京大研究室本「なる」の選択が微妙ながらも以後伝本に投影するかの点がいさゝかながらも留意されるにとゞまる。

その㈡の増補は、2の本書のみの釋文追補—伝本中内閣文庫C本に「煩悩也」と瞥見されるのみ—は別して、他の1・3・4・5はいずれも、慶應義塾図書館本・京大研究室本・内閣文庫A本には記載されずして、本書並びに松平文庫本以下五本に微少な一・二語の相違—但し3は稍ゝ相違し、本書の不備なる追加補入か—を見出すが共通して存するのである。又それは共に—2をも含めて—語義の敷衍、追記の感が予測され、ことに5の項目立て—本書は細記補入する—のごときを併せ思うと、後の追補・補註の本行化とも臆測させるのである。次の5も、その面よりみれば、本文の傍記宛字の本行註文化の途次を重複記載のかたちで残し、いずれ松平文庫本以下五本のごときに整理されてゆく、至極わずかながらの行衛を示唆する一点ともなろうかと思われるのである。

勿論、松平文庫本以下五本は後述するごとく本書を含む上掲両三本とは内容上明白にことなり同一の対象とはなりえないが、同本系を繋ぐ僅少な一端がかゝる点にも見出されるようである。

ともかくも、巻第一に関しては、慶應義塾図書館本に踵を接する京大研究本の系統として近似しながらに、本書は又その独自な欠・補本文が散見されるのである。

更に慶應義塾図書館本との軽細な異同については煩辱をさけ別註[註一]一括したが、上述と略同様の傾向が確認される。

次に、本書の存巻、巻第三・四、巻第九・十、を概観することにする。慶應義塾図書館本は巻第一の零巻であるので、以下は該書に最も近い、十巻完備の京大研究室本を校勘の基盤におき言及することにする。本来、緒言にも誌したごとくに本解題は該書の伝存諸本における位地の措定にあったのであり、当然巻第一の孤巻に限定すべきものと考

えたが、他巻の存する伝本の大枠も一通りは把握すべくあら〳〵以下に粗述するものである。

本書は既述のごとくに、京大研究室本とは同系且つ近似するのは残存諸巻も略同様であり、以下に掲示する諸例などが其の主たる処であり、細部本文は大約巻第一の対照註記の結果と同じくすることが予測されるので重ねて贅言するを避けて、本書の異同概要を誌すにとゞめる。

巻第三・四

1 いちはやき世のいとおそろしう

●いちはやき すくれたるといふ詞也—京研本 阪磨巻 1ウ

いちはやき世のいとおそろしう

●伊勢物語云いちはやきみやひをなんしける いちはやきは／すくれたると／いふ詞也—京図本 同巻1オ 松本

以下五本「…前同……伊勢物語云いちはやきみやひをなんしける いちはやきは／すくれたるを云詞也／すみやかなる事か」

巻第九・十

2 ●総角大君 あけまきのまきにてかくれ給ぬこれによりてあけまきのおほい君と申 薫左大将の念者なりき —京研本 橋姫巻1ウ 松本以下六本

（岸本当該巻存）略同

●総角大君 あけまきの巻にてかくれ給あけまきのおほい君とそ 薫左大将に心つよくてやみにし人—京図本 同巻1オ

3 ●通昔中君 匂兵部卿宮にむかへられて若君なとまうけ給へりしほとに夕霧の六君にかよひ給しころふるさとを心にかけ給へりしより通昔中君となつく —京研本 同巻1ウ 松本以下六本

略同、但シ、双行ヲ本行トシ、「匂兵部卿の宮」ト「の」字、「若君なんと」ト「ん」字入ル、又、「給へりしおり」ヲ「給ひしより」(竜本以下六本)ニ作リ、更ニ「通昔中君となつく(むかしにかよふなかのきみとなつく)」と傍記アリ

●通昔中君　匂兵部卿宮にむかへられほとに夕霧六君にかよひ賜しころふるさとを／心にかけ給へりしより通昔中君となつく—京図本　同巻1オ

4 ないけうの御さえさとりふかく物し給けるかな／●内教　●才　●寤　●覺—京研本　同巻2ウ　松本以下六本略同、但シ「御さえさとり」の「さ」字欠、「●寤」ナシ

ないけうの御さえさとりふかく物し賜けるかな—京図本　同巻2オ

5 ろなうものゝようにすはかりのはうしなとも……／●無論　●拍子—京研本　同巻6オ　松本以下六本略同

ろなうものゝようにすはかりのはうしなとも……下略……—京図本　同巻5ウ

6 人をはかりこちて／●詐—京研本　同巻6オ　松本以下六本同、但シ「詐　ハカリコツ」ト附訓

人をはかりこちて—京図本　同巻5ウ　以下ニ当該字傍記ト本行ノ例散見スルモ省略ス

7 物とはなしにとかつらゆきかこの世なからの……下略……—京研本　総角巻11ウ　松本以下六本同

物とはなしにと　—余白—　この世なからの……下略……—京図本　同巻12オ

8 ろうに御車よせており給　さうしみ／●廊　●正身—京研本　同巻14オ　松本以下六本同

ろうに御車よせており給　さうしみ—京図本　同巻15オ

9 いとくうつきて／●功つきたる也—京研本　同巻16オ　松本以下六本同、但シ別行ニ叙述ス

いとくうつきて／●功つきたる　つかせ也　愚案也　京図本　同巻17オ

10 松蘿契夫事(ママ)也 古詩 京研本 寄木巻20ウ cf松本以下六本「松蘿契夫妻事 古詩」(右松本)

契夫妻事也 左伝—京図本 同巻23オ

11 1ひらうけ廿 やゝ(二朱)見て 3わかなへいろのこうちき かや(三朱)〳〵(一朱)といふをせいし給／●檳榔毛車 ●良見 よく〳〵見る也 ●若苗色 ●かひ〳〵しき也 かしかましき也—京研本 同巻26ウ

1ひらけ(ママ)廿 2かや〳〵といふをせいし賜／●檳榔毛車／●かひ〳〵しき也 かしかましき也

3やゝ見て 4わかなへいろのこうちき／●良見 よく〳〵みる也 ●若苗—京図本 同巻30ウ

2かやう〳〵(ナシ竜・内B・神・東・岸本)といふをせいし給／かひ〳〵しき也 かしかまかしき也

ひらうけ 1やゝみてゝ(ナシ竜・内B・神・東・岸本)／3檳榔毛車 良見ヨリ〳〵ミル也

4わかなへいろのこうちきゝたり／若苗也(ナシ内B本)—松本以下六本同

12 為我謝太上皇謹献是物尋舊好也○好蔵是物 長恨哥伝—京研本 同巻27オ

為我謝太上皇謹献是物尋舊好也 長恨哥伝—京図本 同巻31オ

為我謝太上皇謹献是物尋舊好也好蔵是物 長恨哥—松本以下六本

13 こたみのとう こて給 ●こち給也 ことよくいひこち給といふなり きこえこつなといふ詞也—京研本 東屋2ウ

こたみのとう こて給 ●こち給なり きこえこつ／なといふ詞也—京図本 同巻32ウ 松本以下五本同 以下岸本欠巻

14 つゐによるせはさらなりや

●おほぬさとなにこそたてれなかれてもつゐによるせはありといふものを—京研本 同巻3ウ4オ 京図本・

松本以下五本欠

15 ◦いつしかとまつちの山のさくら花まちいてゝよそにきくかゝなしさ（松本以下五本）　き（松・竜・神本）・後撰

たれをかもまつちの山のをみなへし秋をちきれる人そあるらし　小野小町—京研本手習巻20ウ　松本以下五本同

◦いつしかとまつちの山のさくら花まちいてゝよそにきくかゝなしさ　後撰　小野小町（ママ）

タレヲカモマツチノ山ノヲミナヘシ秋トチキレル人ソアルラシ　京図本　同巻48オ

16 ひかり(1)あることのはをのみ／かきとめはわかのちのよの／やみはまよはし

君を(2)のみたのみそめたるみつくきの／あとゝむ(ママ)へきしるへあらせよ—京研本　夢浮橋巻〻尾27オ　松本以下五本（1）詠存、京図本欠

以上が、本書存巻に見出される京大研究室本との主なる本文異同である。第二冊—巻第三・四—と第三冊—巻第九・十—との間には区〻たるばらつきをみるが、全体的にみれば本書の欠落本文がその半ばを占めている。則ち、2・3・7・8・10・13・14、の七ヶ処にも及ぶ。そして、その過半—13・14の二例を除く—は京大研究室本、松平文庫本以下五、六本（岸本巻第九存）に共通して存する本文であり、やはり本書の誤脱本文とみるのほかはない。3、又7などは行文中に意図的に余白を設けている。又10も明らかな目移りによる錯誤であって、本書の依拠本の欠脱と共に転写上における誤謬が指摘されるものであろう。13例はともかく14例も恐らく本書及び松平文庫本以下五本の同様な脱文であろう。

更に16例の巻尾両詠の存否は上記諸例とはことを異にするが、第一詠の載録は、あるいはもと〳〵のもとであったかもしれない。松平文庫本以下五本に附載するに対し本書は書写するところではない。

加えて、15例は行間に同筆ではあるが、追補細記した片假名交りの例証歌であるが他本はこれを本行とするのは附記したごとくであって、それは本書の書落しの追補か、他本との対校結果であるかの問題であるが、後者ならば本書系統の欠脱本文として措定しなければならない。同じく細記追補の例は此のほか二・三[註二]を所見するのであるが、いずれも本行同様に平假名交り文であり、稍〻違和の感はまぬがれない。イ本校記もわずかながら散点するが、本例にはイ本註記もみぬので俄かには決しがたいが、これも他本—或は既に依拠本に—による校訂の結果であり、本書系の欠脱本文として数えておくことにする。

かくみると、本書独自の異文はすくなく、京大研究室本の本文と相違するところは、次の増補本文と叙述形態の略二点に絞られるのである。

その増補箇処といっても細〻たるものであり、1・9の二例である。1はともかくとして、9は提示するまでもなく後人追記の感をまぬがれない。1において本書と共通する松平文庫本以下五本の尾部も又9同様の追記附註の印象が残る。たゞ此の点など本書との交渉を示す微細な接点としてみることが出来ようか。

次の叙述形態として留意されるのが、11の例であるが、掲示本文にみるごとくに、京大研究室本の註記本文の掲出次第は前後を誤り右傍に改訂順序を一・二・三と朱訂している。左傍に私に附した算用数字は源氏物語にみる本文次第である。因みに、こゝに各本の註出本文序次を整理すると、

京大研究室本　1（冒頭部）・3（二）・4（三）・2（一）

本書　1（同上）・2（一）・3（二）・4（三）

松平文庫本以下五本　2（一）・1（同上）・3（二）・4（三）

とあり、本書の叙述次第が源氏物語本文のそれと同じく整序されており、京大研究室本の傍記朱訂に序列している。本書が同本の朱訂を継承するものであるか否かは、京大研究室本が原紫明抄をその儘に書承しているか、どうかの問題にも係り、にわかに決しがたいが同書をその朱訂のごとくに整序するものであることは確かである。

それに比し、松平文庫本以下五本は2（一）・1（冒頭部）と明らかに顚倒し且つ其の経由を辿りえない。本書、京大研究室本系とは掲示一例ながらも対置されるのである。

次に、4・5・6、のごとき、註文本行を傍記する例はその逆即ち傍記宛字を本行化する例と共に両書相互に間〻散見され、その多くは後者の傾向を、恐らくは伝写の過程に辿るのであろうが、掲出例は前者の例であって、その点京大研究室本とは一線を劃するものであろう。

残す12の例は上記11例の叙述次第の訂正例と同じく京大研究室本のミセケチ補訂本文と本書は同一である。しかし、両書の伝写上に於ける依拠関係は上例と同じく不明というほかはない。松平文庫本以下六本はこれに対し、同本の補訂本文をも併せ本行化し誤写しているのみならず、出典を「長恨哥」と錯誤を重ねている。その経由も又明らかにしがたい。後述するごとくにその伝流系類を異にするからである。

両書に於ける大略の異同につき蛇足言及したが、結句、その予測される本来の相違は二・三例にすぎず、本書の誤脱本文か、京大研究室本にみられる補訂—叙述次第・見消ち等を含め—等にとゞまり、両書は巻第一と同様に緊密な近似関係にあり、同一系統本の上での、その伝流の間に生じた異同として本書を位地づけるのが妥当であろうと想定されるのである。

猶細部にわたる異同は巻第一にて掲示したと同じく小異は夥多におよぶが、それも又上述の想定を拒むものではな

く、その傾向を辿るものである。但し、その中では、所引典籍の訓点には相互に粗密のばらつきが見出され、ことに四声点、オコト点等は本書においては刪除するのが殆んどである。書写年代の相違でもあろうか。

次いで松平文庫本以下五本乃至六本について一言するに、上掲の諸例にては両書との相違は系類の上にまで及ぶものとは判断しがたくもあろうが、後述する同書系類解題にて言及するごとくに本書等系類とは別するものであり、同一基盤上の比校からは、両系の接点を探るのほかにその意義は尠いといえようか。

註一　以下に、前掲書両三本の別註に倣い、紫明抄巻第一につき、慶應義塾図書館本本文との細部にわたる異同の大概をあげ、併せて他諸本に於ける当該箇処の類同につき添記する。但し、上記両三本の解題中に対照註記した箇処、又翻印補記等は重複する処尠なからず、再記を省略した。又、本抄所引の内・外典の附訓・返点等は諸本各〻の施点時を明示しがたく煩雑が予想されるので省略することにした。比校本文の仮名遣い等の異同は前掲註同様に対処し略叙した。

諸本中、**松**・**竜**・**内B**・**神**・**東**本は一系統本であり、その本文上に異同の存するをのぞき「**松**本以下五本」、更に**京研**・**内A**本も同一本文の場合は「**京研**本以下諸本同」と略記する。猶上段は慶應本、下段は本書本文である。

桐壺巻

二オ3　正五位□下（諸本）（**京研**本以下諸本同）―正五下、三ウ8　源光卿（**内A**本）―源光公（**京研**本・**松**本以下五本同）、四オ9　いつかれ給ひし（**京研**・**内A**本同）―いつかれ賜し（以下上記ノ如キ漢字表記、又、仮名遣、助詞等ノ小異ハ任意ニ省略ス、cf**松**本以下五本脱文箇所「給し」）、六オ4　四徳謂婦徳婦言婦容婦功也（**京研**・**内A**本同、但シ「婦言」傍記ナシ、**松**本以下五本「四徳謂婦徳嬪客婦功也」）―四徳謂婦容婦功也、六オ8　掌弔臨卿大夫之喪也（**京研**本同）―掌于臨卿大夫之喪也（他本**内A**本註ニ記ス、以下同ジク重複再記セズ）、六オ11●あつしう（**京研**本同）―あつしう（**内A**本同、**松**本以下五本注本文欠）、六オ12あいなう（**京研**本同）―あいなう（**内A**本・**松**本以下五本同）、七オ2　日本記（**京研**・**内A**・**竜**・**神**・**東**本同）―日本紀（**松**・**内B**本同、以下諸本不定ニテ省略ス）、八ウ3　法曹至要抄（**京研**・**内A**本同、cf**松**本以下五本「法曹至要抄云」）―法曹、八ウ9　七歳無服之殤也

（京研・内A本同）―七歳以前無服之殤也（松本以下五本同）、九オ1 ◦贈正一位（京研本以下諸本同）―◦僧正一位、九ウ2 女御□□（といい）はるへき例（諸本）（京研本以下諸本同）―女御といはすへき例、一〇ウ8 えたふましうない給ふ（京研・内A本同、cf松本以下五本「え」欠）―えたふましうな賜、一一ウ2 亭子院に□（い）らせ給て（京研）（京研本同、cf内A本・松本以下五本「亭子院ニまいらせ給て」）―亭子院かゝせ給て、三オ1 けふらにこそはありけめ（京研本以下諸本同）―けふらにこそありけめ（助詞「は」の欠脱ハ間〻散見サレル、上記一例ヲ挙ゲ以下省略ス）、一三オ2 自由のわさはし侍へき（京研本以下諸本同）―自由のわさをはし侍へき、一三オ5 あまたゝひ見し程に（京研本以下諸本同）―あまたゝひみゐし程に、一三ウ1 其心をえたり（京研本以下諸本同）―心をえたり、一五オ5 かのおは―かのおは（cf参同補註）、一五ウ4 和名／与古不江（京研本同、内A本・松本以下五本声点ナシ）―和名／与古不江、一六オ12 渤海國入覲（京研本以下諸本同）―海國入覲、一七ウ7 皆盛折節（柳筥歟）―皆盛柳筥（参内A本註）、一七ウ8 被召着各着円座（京研・内A・竜・内B・神・東本同、cf松本「被召着各円座」）―被召各着座円座、一八ウ3 おもてはいし。給（たてまつり）（京研・松本同、但し傍記本行）―おりてはいしたてまつり賜（給）（諸本）（内A・竜・内B・神・東本同）、一九ウ1 うへはをり物なかへうらはひとへもん（京研・内A本同）―うへはおり物なかくうらはひとへもん（cf松本以下五本「うへはをりものなるへしうちはひとへもん」）、二〇ウ5 人〻まかてちらす（京研・竜・内B・神・東本同）―人〻まてちらす（内A・松本同）

箒木

二ウ5 匡房卿説（京研本以下諸本同）―匡房説、三オ7 すへて 同事也（京研本以下諸本同）―すへて也 同事、三オ1 ◦なまめきたる□（也）（諸本）（京研本以下諸本同）―なまめきる也、同オ1 ま与み可通音故也（京研本・松本以下五本同、cf内A本「まとみと音可通故也」）―欠、三オ5 ◦なまめかす（京研本同）―なまめかす（内A本・松本以下五本同、但シ声点ナシ）、三オ12 〻以風刺（利）上主（主）而（内A本）（京研・内A本同）―下以風刺上至文而（cf松本以下五本略同「々以風ニ利（ス）上主文而」、以下、傍記訂正ヲアゲズ）、三ウ3 下猶風靡草（京研本以下諸本同）―下猶風之靡草、三ウ8 すへなくまたせ（京研・内A・松本同、cf竜・内B・神・東本「すんなくまたせ」）―すへなくまた也、三ウ9 ◦無便（スナ）万（同）（松本以下五本）（京研本以下諸本同）―◦無便、三ウ10 ◦綽也（京研・内A本同）―綺也（cf松本以下五本「綽（綺或本）也」）、三四オ11 ひたすらと……（に）（内A本）なきわたる覧 後撰（京研本以下諸本同）―ひたすら

と……なきわたるらん、二四ウ3 こたちは（京研本同、内A・松本以下五本声点ナシ）—木たちは、二五オ3 ●觀身……不繫舟（京研本以下諸本同）—●觀身……不繫舟 朗詠、二五オ4 ●6 ひゝちゐたり（京研本同）—ひゝらゐたり（内A本同、松本以下五本4「ひらゐたり」6「※ひらくゐたり……或本云 又ひらいたりともいへり」、但シ竜・内B・東本ニハ「ひ※cfらゝゐたり」ニ「ひゝらゐたり 或本」ト更ニ傍記ス）、二五ウ1 なゝくしいつる事（京研本以下諸本同）—なくしいつる事、二六ウ9 ●正身也（京研本同、松本以下五本「正身」、内A本「正見也」）—欠、二七オ10 見ることに……山のてる覧 後撰（京研本以下諸本同）—みることに……山のてるらん、二七ウ10 ふみわけたる（京研本以下諸本同）—吹わけたる、二七ウ10 ねたます（京研本同）—ねたます（内A本・松本以下五本声点ナシ）、二八オ2 現其室中云々（京研・内A本同）—現中其室中ノニ云々略文（松本以下五本同）、二八ウ10 老子経云大弁如訥コト、モリ（京研本同）—孝子経云大弁如納コト、モリ（cf内A本「孝経云大弁如訥コト、モリ」、松本以下五本「大弁如調コト、モリ 孝少経云」）、二七オ7 我獨醒り此故に王にはなたれたり（京研・内A本同）—我獨醒たり此故にはなたれたり（松本以下五本略同）、三〇オ1 菊花をのみ（京研・内A本同、松本以下五本「菊の花をのみ」—菊花のみ、三〇オ3 注蒙求云（京研・内A本同）—欠（松本以下五本同欠）、三〇ウ6 ●又九条殿御記（京研・内A本同）—●九條殿御記（松本以下五本同）、三〇ウ6 至昨日（京研・内A本同）—至于昨日（松本以下五本同）、三オ1 なめけなる／●滑也 無礼儀也（京研本以下諸本同、但シ内A本「無礼儀也」ノ「也」脱ス）—なまめけなる／●滑也 無礼義也、三オ3 たゝいまゝうのほると（京研・内A本）り（京研・内A本略同）—たゝいまうのほるに（cf松本以下五本「たゝいまうのほりと」）、三オ8 ことのはにか（京研本以下諸本同）—ことのはには、三ウ1 なよ竹はにかたけ也（京研本同、内A本欠）—なよ竹はわかたけ也（松本以下五本同）、三三オ8 数ならぬ……きゆるはゝきゝ／●その原や……あはぬ君かな 源重之（京研本・松本以下五本同）—かすならぬ……きゆるはゝきゝ 源重之／●そのはらや……あはぬ君かな（内A本同）

空蟬巻

三四オ10 ●尖也（京研本以下諸本同）—小大也（上欄ニ「尖」ト訂ス）、同オ10 さかりは（京研・内A本同）—さかりは（松本以下五本声点ナシ）、三四ウ12 たはふれ也（京研・内A本同、cf松本以下五本「たはれたる也」）—欠、

夕顔巻

四一オ8 てもあてはかにゆへつきたり（京研本「は」ニ平声点ヲ付ス）たれは（京研本）（京研本略同）— てもあてはかにゆへつきたれは（内A本・松本以下五本声点ナシ）、四一オ10 夕顔のはな（京研本以下諸本同）—ゆふかほのやと、三八オ4 さかりは（京研本同）—さかりは（内A本・松本以下五本同、声点ナシ）、三九ウ7 きぬたのをと（京研本以下諸本同）—きぬたのほと、四三オ5 朝露言易盡也（京研・内A本同、cf松本以下五本「朝露言易蓋也」）—朝露言易盡或本心ハ盡キ也、同オ5 豈不惑哉豈不惑哉ナシ（松本以下）（京研・内A本同、松本以下五本略同）—豈不或哉豈不或哉、四三オ7 なもたうらい（京研本以下諸本同）—なともたうらい、四三オ9 弥勒佛（京研本以下諸本同）—弥勒、四三オ9・10 おきなかゝは（京研本同）—おきなかゝは（内A本・松本以下五本同、声点ナシ）、四四ウ5 狐蔵蘭菊叢（京研・内A本同）—狐蔵ネカクル蘭菊叢ノ（松本以下五本同）、四六オ10 五條三位殿俊成卿（京研本以下諸本同）—五條俊成卿三位殿、四六ウ10 人にはあらす（京研本以下諸本同）—人にあらす、四七オ5 故三位殿俊成卿（朱）（京研本以下諸本同、但シ松本以下五本傍記「卿」字脱）—故三位殿、四七ウ1 和名以閇波土（京研本同）— 和名 ●以閇波土（松本以下五本同、声点ナシ、但シ内A本「以閇婆」ト字体不明）、四七ウ2 ●夕顔上 十九歳夕顔（京研・内A本同、cf松本以下五本「夕顔上十九歳也」）— ●十九歳、四七ウ3 いとしも人に（京研本以下諸本同）—いとしも人に、四七ウ4 しかならひては（京研本同）—しかならひてそ（内A本・松本以下五本同）、四八オ5 ついたちころにそ（内A本・松本以下五本同）—ついたちころにて（cf京研本「ついたちころには」）、四八オ10 おかしきさまなる（京研本以下諸本同）—おかしきさまなるは、余歟四八ウ1 たひのきぬ一にてそ（京研本以下諸本同）—たひのきぬにてそ

如上がその大概である。その異同の過半は本書の誤写・誤脱に起因するところであり、独自異文というべきは極めて尠い。それをのぞけば、前掲両書—慶・京研本—の異同註記に参照附記した箇処がその主なるものであり、その点より観ても既述した如くに京大研究室本とは最も近似する同系統上の伝写一本として措定される。

しかし、纔かながらではあるが松平文庫本以下五本との類同箇処が、此処にも散見され伝流上に於ける本文変遷の跡を垣間見るのである。

又、両書に施される声点の排除は本書以下、近世書写本たる内A本・松本以下五本に共通し、或は両書にみる傍記宛字・細

補註文等の一部本行化のごときと共に伝流の間の崩れを示している。

猶、附訓・返点等の比較は省いたが、本書も前記両書同様に可成り詳密であり、当然のことながら過半は共通するもあらたな加点も尠くはなく、両書を補うものでもあろう。

註二　細補追記は両本共に間〻散見される。一・二例を掲げると

●うらかせになひきにけりなさとのあまのたくものけぶり心よはさは　本書本行、浮舟巻41オ　京研本、平仮名交リ文ニテ細補ス

ふたもとは又もあひきこえんと思給人あるへし（おもひ賜（本書））　京研本本行、手習巻21オ　本書同文細補ス

のごとくであるが、共に本文同筆の平假名交り文にて書写後の誤脱を補足した処と判断され、本論例示の片假名交り文とは異る印象が残る。

もっとも、京大研究室本―手習巻20オ―にも、

●藕実　一説云蓮子ハ盃（サカツキ）之一名也是ハ盃ヲイタセルヲイフ（「ヲイフ」無シ、本書）ニヤト云〻但ス、シヤカニウルハシキハスノミトソ心ウヘキ

のごとき片假名交り註文も見出され、本書は此れを平假名交り文とするが、両書は転写関係もなく、上例とは別して対処すべきであろう。

伝本略称一覧

㈠

(1) 慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写　存巻第一零巻　一冊　略称「慶」

(2) 国立公文書館内閣文庫蔵〔室町末近世初〕写　存巻第一零巻　一冊　同「内A」

(3) 島原図書館松平文庫蔵〔江戸前期〕写　存九巻（欠自若紫巻末摘花巻至巻第二）　十冊　同「松」

竜門文庫蔵〔江戸初期〕写　存九巻（欠右同）　五冊　同「竜」

国立公文書館内閣文庫蔵〔江戸中期〕写　存九巻（欠右同）　十冊　同「内B」

神宮文庫蔵〔江戸後期〕写　存九巻（欠右同）　五冊　同「神」

東京大学総合図書館蔵〔室町末〕写　存九巻（欠右同）　十冊　同「東」

山岸徳平氏蔵　同氏令写本（南葵文庫本）　存巻第六・九　一冊　同「岸」

(4) 国立公文書館内閣文庫蔵〔江戸後期〕写　存十巻　三冊　同「内C」

㈡

(1) 京都大学国語学国文学研究室蔵〔南北朝末〕写　存十巻　十冊　同「京研」

(2) 京都大学附属図書館蔵応永十七年奥書〔室町後期〕写　存巻第一・三・四・九・十　三冊　同「京図」

㈢

九州大学附属図書館蔵〔室町末〕写―抄出本―　一冊　同「九」